
Blossom

呼飛参上

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l o s s o m

【Nコード】

N 2 2 0 8 M

【作者名】

呼飛参上

【あらすじ】

矢端祭2日目 音楽で、演劇で、またある者は皆を支える立場
となつて。

かけがえのない日々に、彼らはどのような「花」を咲かせるのか？

とある高校の文化祭を舞台に、4つ物語が繰り広げる群像劇。

第1演目：演劇部 「嫌いな笑顔」

もとより、私は変人が嫌いなのだ。

そして、部長は変人である。

つまり、私は部長が嫌いだ。

何が嫌いって、今どき「ふははははは」なんて笑い方をする人間を現実世界であいつ以外に見たことがない。

それに、他の先輩たちは私のことを苗字で呼び捨てか“さん”付けで呼ぶのに、あいつだけは「五条君」などと言ってくる。妙に馴れ馴れしく感じられるその二人称を聞くたびに虫が背中を這い上がるような気分だ。

それなのにあいつは、私がそう思っているのを承知の上で話しかけてくる。夏休みが始まったばかりの頃、何故そんなに遠慮がないのか訊いてみた。そうしたらさも当然のように

「副部长といったら、部長である自分の女房役であろっ」
などと言いやがった。

不愉快を通り越してムカついたので、思わず殴りそうになった。というか殴った。いけない、と自制しようとした頃にはもう、私は右腕を振り抜いていた。

でもあいつが悪い。年頃の異性を捕まえておいて女房呼ばわりはあんまりだ。あいつだって殴られた後もびんぴんしていたし、別に問題ないだろう。ちなみに、起き上がった第一声が

「ふはははは、副部长たるものそのぐらいの元気がなくては」

だった。もう一度殴りたかったけれど、さすがに止めておいた。ともかく、私は部長が嫌いなのだ。

……なのに、今日の私ときたらそいつのためにお弁当を作っ

ている。

ご飯を詰めているとき、食事を作るなんてまるで本当に女房みただいなどと考えてしまった自分をその後十分は呪い続けていた。右肩にかけたセカンドバッグ。今日は文化祭の二日目だから教科書の類を持ってきていないので、普段よりずっと軽い。

ところが、問題は左手の紙袋だ。こちらは平時の倍近い重さまで増えている。中には私のお弁当もあるのだが、この増加量分こそが部長にくれてやる分だった。

とはいえ、これは断じて私の好意によるものではない。

私にとっては罰ゲーム。あいつにとっては景品に相当する品物だ。私の意思であいつにわざわざ物をくれてやる機会など、後にも先にもあり得ない。

ことの始まりは一昨日　文化祭の準備日のことだ。

＊

私とあいつが所属しているのは演劇部。部長や副部長といった肩書きもそこでのものを指す。

この矢端^{やはた}高校自体はそこそこの歴史があるのに、演劇部は私が入学する一年前にできたそうで、部員数のわりには予算も道具もちつぽけだった。歴史をたどれば昔にも存在していたのだが、人数が足りない時期があつてそこで一度廃部になつたらしい……というのを、図書室にあつた学園史で前に読んだことがある。

中学時代も演劇部だった私は、この学校に入学しても演劇部に入部した。

するとどうだろう。当時二年生だったあいつが三年生たちを差し置いて部長の座についていたのだ。

その部長の名前は、榊行貞といった。

はじめて聞いたとき、いつの武将だと思った。

そして今年度、部長は相変わらず部長のままだった。あいつの破

天荒な行動に毎回肝を冷やされていた私は、あいつに対抗するためにはそれなりのポジションを獲得するしかないと副部長に立候補した。

正式に副部長になることが決定してから私は、二年生で部長になっていたのはどういふことがあいつに問いただしてみた。すると「自分のカリスマ性ゆえ」などとふざけた答えが返ってくるばかりで全く相手にならなかった。

そんなこんなで、私にとってこの学校で二度目の文化祭 副部長になってからは初めての文化祭が、明日にまで迫っていた。

「榊いるー？ 書き割りの置き場んだけど…… ってそ何してるッ！」

私は実行委員会の本部から戻ってくるなりそう叫んだ。

場所は講堂。明日から二日間、私たち演劇部が公演を行う場所だ。当日は他の団体も利用するためずっと居座ることは出来ないけれど、準備日である今日は丸一日演劇部が使って良いことになっていた。

本番では直前まで別の団体が使っているから、舞台をセットできるのは開演ギリギリということになる。つまり当日はなるべくテキパキと動きたいから、今のうちに色々と打ち合わせをしておきたいなのに。

ステージの上には、明らかに準備と関係の無い人ばかりが出来ている。

近づいて見てみれば、その真ん中で座る二人の姿があった。片方は予想通りとも言つべき、部長の榊。ステージの床にあぐらをかいている。

ところが、あいつに向かい合うように正座しているもう一人は意外な人物だった。

「……何してるの、支倉」

隣のクラスの支倉ひなた。おっとりした性格で、この部では脚本から演出までを担当している。部長を目にした瞬間は怒鳴ろうかとも思っていたけれど、普段はしっかり者な支倉がいるとなるとそう

もいかない。

「あ、あのっ、すみれちゃんっ」

振り返るなり、支倉は慌てた様子で手を振る。ちなみに、私を下の名前で呼ぶのはこの子ぐらいだ。

「これはね、えっと、その」

「やろうと持ちかけたのは自分だ。支倉君を叱るのは止めてあげてくれ」

支倉の言葉を引き継いだのは他でもない榊。ところがこいつは、床に視線を落としたままだ。

「……別に叱らないわよ」

図星を指され内心ドキツとしながら、榊の視線を追う。その先は、そいつと支倉の間に置いてある四角い盤だった。

「なんで将棋がここに……」

溜息混じりに言つと、榊は「これを持ってきたのも自分だ」と口を開く。

「ちなみに今は、休憩時間ということになっている。五条君が使いに行っている間で申し訳ないが、そうさせてもらった」

「別にいいけど」

部活に関してはけじめをつけて欲しい。けれど、私だって校則が云々とまでいちいち口出する気は無い。

将棋程度ならいいか。そう思い人だかりを離れようとしたところで、ふと盤面が気になった。

支倉が比べ物にならないほど圧されている。

相手の榊もそれなりの棋力を持っているみたいだが、正直言つて支倉の手があまり芳しくないせいで具体的にどれほどなのか計り知れない。

榊を見てみれば、真顔なのだがいまいち面白くなさそうな表情だった。恐らく、張り合いが無いのだろう。

支倉は盤の上空で手をさまよわせると、金の駒を取って斜めにずらす。

そこは諦めて王を逃がした方が長生きできるのに……。思わず顔をしかめると、榊がふいに私を見た。

「ほほう」

そしてニヤリと笑みを浮かべる。正直、この顔がこいつの表情の中で一番嫌いだ。

私は榊に向かってひと睨みを利かせてから、盤面へと視線を戻す。ここからは榊が王手を連続して追い込む、いわゆる“詰める”の状態で。

支倉自身もそれを理解していたらしく、すっかり肩を落としてしまっていた。

榊は榊で、容赦なく最善手を指す。その一手で、勝敗はより明らかなものになってしまった。

「……負けました」

小さく溜め息をついてから、支倉はぺこりとお辞儀をする。一拍遅れて榊も頭を下げ、対局は終了した。

「すみれちゃん……」

立ち上がって振り返るなり、支倉は私のところへととてと歩いてきた。その目にはうつすらと涙さえ浮かべている。

「部長がね、将棋を指せる奴はいないのかって訊くから、私ちよつとできますよーって言ったら、ぜんっぜん容赦なくてね……」

言いながら、私にぎゅっと抱きついてきた。

「少しは手加減しなさいよ」

支倉の肩越しに言葉を投げるが、返ってきたのは

「自分は情けを持つことが苦手だな」

という血も涙もないコメントだった。

「ところで五条君」

「何よ」

「君はこの中でもなかなかの腕前のようにだが」

榊は駒を片付けながらも、じっとこちらを見ていた。周囲の部員たちもつられるように振り返る。

「どうしてそう思うのよ」

集まる視線に一步退きながら訊くと、

「支倉君の指す手に眉をひそめたのは君だけだったのだよ」

「だってそんなの……」

見れば分かるじゃない、と言おうとして止めた。なんだかこれは大変まずい流れな気がしたのだ。

「ほほう」

ついさっきも見せた不敵な笑みを私に向ける。まずい流れはすでに止めようがなくなっていた。

「良かったら副部長、一局指してみないか？」

あえて副部長と呼んだのが憎たらしい。他の部員たちに『部長VS副部長が見られる』という空気を作って、私を逃がさないつもりだ。

あいつの目論見どおり、周りのみんなは私と榊を期待の目で見る。その視線を浴びながらニヤついている榊がさらにム力ついた。

間違っても、空気に流されてではない。あの自信満々な表情をぶっ潰すためだ。

肩に寄せられたままだった支倉の頭をひととおり撫でてから、ゆっくりとその体を離す。

「受けて立つわ」

文化祭前であることと相まってか、私が一步踏み出せば周囲はやたらと色めき立った。

「それでこそ副部長」

榊はそう言っただけでもニヤつく。けれど、私は黙ってそいつの向かいに座る。

私が位置に収まると、他の部員は盤を覗き込むように集まってきた。特に支倉は、私の隣まで来てしゃがみ込んでいた。

「ときに五条君」

一度は片付けた四十枚の駒を再び盤面に並べながら、榊が口を開く。

「何よ」

「念のため君の棋力を聞いておこう」

「知らないわよそんなの。公式な場で測ったことなんてないから」

「そうか」

「分からなくなたっていいじゃない。どうせ手加減は出来ないんですよ？」

詰まれた駒から王将を引つ張り出して言えば、「そうだな」と榊は満足げに微笑む。

「それでは提案なのだが、ただ指してもつまらない。 ああいや、この“つまらない”は将棋の“詰む”と掛けたわけではなく、単に面白くないという語意でだな」

「分かってるわよ。さっさと趣旨を述べなさい」

「手厳しいな五条君は」

むむうと唸ってから、榊は仕切りなおした。

「ともかく、何かしらを賭けないかということだ」

「賭け？ 金品なら乗らないわよ」

「学生の身分で現金を賭ける気は流石にないが……」

せいぜいコンビ二か、文化祭の出店で奢らされるぐらいだろうと思っていた。

ところが、「そうだな」と呟いてから奴が放った言葉はその予想を大きく覆す。

「例えば、文化祭二日目。明後日の昼食を、負けた方が作ってくるなどはどうだろう？」

おおおっ、と周りが盛り上がる一方、私は開いた口が塞がらない。「明日は上演の時間を考えるに、あまりのんびりと食べていられないからな。明後日なら問題ないだろう。どうかね、五条君」

「あ、あ……」

「あ？」

首をかしげる榊に、思い切り言葉をぶつける。

「あんたねえ！ そこまで私に負けない気でいるわけ！？」

「どういうことかね？」

「どういうことも何も、私が勝ったってろくなメリットが」

「おや、心外だな五条君」

「は？」

駒を並べ終えて腕組みをした榊は、少し意外そうな顔をしていた。そして次に口を開いたのは、私のすぐ隣にいる支倉。

「すみれちゃん部長のお弁当、見たことないの？」

「あるわけないでしょ」

男子の弁当を覗いて何が楽しいんだか。ましてやこいつのなんて自分で作ったって言ってたんだけど、すごくおいしそうだったよ？」

無垢な表情でそう私に告げるのだった。

「……マジ？」

「まじまじ。大まじですよ」

にこにこ笑いながら頷いてみせる。

「夏休みの終わりごろかな。五目御飯に煮物とかおひたしが付いて、色取りもすごくいいの」

支倉が普段から料理をしているのは、調理実習で聞いた。その彼女が言うのだから本当だろう。しかもそんな、和風な弁当を。

「見かけはどうだか知らんが、自分はどちらかといえば家庭的な男でいるつもりだぞ」

腕を組んだまま榊が胸を張る。こいつがエプロンを身につけて台所に立つ姿を想像してみたが、どうにもギャグとしか思えなかった。「これぞ男の料理だふははは」とかいいながら闇鍋もどきを作っているほうがよほどお似合いだ。

「どちらかといえば、五条君のほうがそというキャラに見えなくも無いのだが」

「どういう意味よ」

歩を並べる手を止めて睨むが、榊は構わずに言葉を続ける。

「ツンデレで料理が苦手というのは鉄板だぞ？」

「私はそんなんじゃないっ！ それこそ心外よ！」

私が叫ぶのを見て、ますます楽しそうに笑うから腹が立つ。

単語の意味はある程度知っているが、私がそんな枠組みにはまるなどとは理解できない。

「まあいいわ。何にせよ勝てばいいのね」

「そういうことだ」

私の呟きに、満足げに頷いてみせるのだった。一度でいいからこいつが落ち込んでいる姿というものを拝んでみたい。

皆の視線が集まる中で駒を振り、私が先手となる。五枚の歩を再び並べ終えれば、榊はあぐらから正座へと座りなおした。私に駒を振らせたのといい、こういうところは妙に律儀らしい。

「持ち時間は無制限だが、出来る限り長考は控えよう」

「分かってるわよ。明日の準備はまだ終わっていないんだから」

そして礼を交わし、私は一手目の歩を進めた。

私を守りを固めてから攻めようとしているのを知ってか、榊は居飛車で急戦を仕掛けてきた。

けれど、私だってそれを想定していなかったわけではなかった。

こいつの性格上、ズバズバと攻めまくるのが好きそうだと思うているから、ある意味では予想が的中したといえる。

それに、早いうちから攻められたからといって、こちらもあつさり突き崩されることはない。序盤は守りを重視したので、榊の攻め駒をなんなくやり過ごした。

中盤からは私の反撃だ。あらかじめ序盤に固めておいた守りを維持しながら、相手の体力切れを待ってじわじわと盛り返す。毎回動かし方に違いはあっても、基本的な方針はそれで変わらない。

榊は短期決戦に持ち込もうとしたけれど、前半は少し押され気味だった程度だ。ここから一気にたたみ掛けよう。

始まってから極力見せないようにしていた強気の手を指す。

すると一瞬、榊の眉がピクリと動いた。それから、お決まりの不敵な笑みをニヤリと浮かべる。

向こうも気付いたらしい。今までずっと無言で指していた榊が口を開いた。

「単なる臆病ではなかったようだな」

言いながら榊は自分の駒を手取る。その動きには迷いがつかげえなかった。

「当たり前よ」

「さすがツンデレ」

「何の関係があるのよ!」

次の手も攻めに向ける。それに対し榊はまた無難な対応を選んだ。私の捨てた駒を取りながらも、視線は盤面から動かそうとしない。

よし、この調子だ。この形勢を保てば、あいつの攻め駒は切れていくはず。

そうして進めること二十数手。

私は頭の中が真っ白になっていた。そこから何を引っ張り出そうとしても、出てくるのは疑問符ばかり。

まるで、あいつに向かって振り下ろした刀がそのまま自分に返ってきたような感覚だった。どんなに攻めようとも、軽々と受け流されてしまう。

そんなことを続けている間にも、自陣は攻撃を受け続ける。いくら序盤に固めていたとはいえ、与えられた駒は平等なのだ。やがて私の築いた囲いは崩壊した。

急戦を仕掛けたはずの榊といえば、こちらも圧倒的に有利というわけでもない。なのに、私の虚を突いて振られるあいつの刃はいちいち私の喉元をかすめてゆくのだ。

この遊ばれているような戦況に、私の胸はムカムカした気持ちでいっぱいになった。その一方でまったく予期していなかった展開に

ついていけない思考は空白のまま。

中盤を自分の思うがままにできなかった私は、すっかりそのまま丸め込まれてしまった。

周りの部員たちの囁きへ耳を傾けてみるが、もはや決着がついたようなものだとは誰も気付いていないらしい。隣に座る支倉を見ても、じつと盤上に視線を送るばかりだった。

一度だけ、ゆっくりと大きく呼吸をする。そして、膝の上に置いていた手をすつと膝の前の床に下ろした。

そうすれば自然と私の頭は下がり、お辞儀をした形になる。

「……ありがとうございます」

参りました、とは言えなかった。確かに私の負けではあるのだが、その相手が榊だというのがどうにも許せなかった。

しかも私は完全に踊らされていたのだ。まるで、普段の演劇部での私とこいつのやり取りを盤上で再現したかのように。

「ありがとうございます」

一拍遅れてから榊の声も聞こえる。

床から手を離し顔を上げると、目の前のそいつは私よりもしっかりと、深く頭を下げていた。そのことが、さらに私を情けなくさせた。

*

実量よりも無駄に重く感じる紙袋を提げながら、校門を抜ける。

校門とはいっても、普段とは装いが異なっていた。学校名が刻まれているだけで、他にはなんとも無い単なる敷地の入り口。今日はそれが、木材によって組まれたゲートで彩られていた。

準備日である一昨日からこのゲートは設置してあったけれど、くぐる時にはやはり心が弾んでしまう。それもそのはず、もともと私はこういうイベントが好きなのだ。

小学生の頃から、学芸会などの行事が大好きだった。人前に出て

何かを見せるのはとても緊張する。けれど、やり終えた時に体中を満たす充実した気持ちという達成感が、たまらなく気持ち良いのだ。

そんな快感をかみ締めるたびに、もっとそれを味わいたいと思う。今振り返ると、まるで麻薬みたいだ。そういう風にして私は、中学高校と演劇を続けてきた。

次の文化祭が来た時は、私は三年生になっている。文化祭に参加したい気持ちも山々だが、その頃は部活のことだけを考えていられるような時期ではない。あの榊のようにフラフラと生活しているのは例外なのだ。あいつはそれでも勉強が出来る方だというから不思議で仕方ない。

とにかく、全身全霊で演劇に向かえるのはこれが最後なんだ。当日の二日目にこんなことを確認したって今更だけれど、これまでずっと頑張ってきた。

昨日の公演は難なくこなした。あとは、今日の夕方にある最終公演を残すだけ。これをしっかりと終わらせよう。

心なしか歩くスピードが速くなっているのを恥ずかしく思いながら、実行委員の本部へ向かう。文化祭の期間中、校内の鍵は全てそこで管理されているのだ。

校内にはちらほらと生徒の姿が目に入るが、どうせ演劇部では一番乗りだろう。そう思いながら鍵を担当する委員に声を掛けたのだが、講堂の鍵は既に持って行かれていた。

嫌な予感を抱えたまま下駄箱で上履きに履き替え、校舎の階段を上る。

すぐに講堂へと着き大きな扉を開けると、一人の生徒が大道具に囲まれるようにして立っていた。

その生徒はこちらに背を向けていたのだが、私を振り返るなり笑顔で言った。

「　　お、昼飯が来た」

「昼飯言っとなっ！」

やはりというか案の定というか、先客は榊だった。

「他には来てないの？」

その辺の長机に荷物を置きながら訊ねれば、

「自分以外に来たのは今のところ五条君、君だけだ」

と榊は言った。

その呼び方は止めろと言っているのに。でもまあ三年は今日で完全に引退だから、こいつともこれでおさらばできる。

「それにしても、何とも理想的だな。部長、副部長が先に集まるとは」

無駄に爽やか　本性を知る私にとってはム力つくだけだが
な笑顔を浮かべながら話しかけてくる。

「そうかしら。熱心な部員が他に居てくれたっていいと思うけど」

「熱心な部員たちを上回る熱意を見せてこそその部長と副部長だとは思わんかね？」

確かにそうだが、その言葉がこいつの口から出ていると思うと気に食わない。それに、私があんなことを言ったのは、朝っぱらからこんな奴と二人つきりでいることが嫌だったからだ。

携帯電話を取り出して支倉に連絡を入れてみるものの、彼女もまだ学校に着かないらしい。私は小さく溜息をついて、携帯を閉じた。小さく溜息をついてから講堂に備え付けの座席へ腰を下ろし、前方に目をやった。

今のうちにセッティングや本番の流れを頭の中で確認しよう。今日の講堂は一日目よりも過密スケジュールだから、舞台の用意も撤収もてきばきと済ませなくてはいけない。

そう思っただけでステージを見たのだが、そこには腰に手を当てたままぼんやりと書き割りを見つめる榊がいる。あんなところで何をしているのだろうか。

ふと自分が榊の横顔を眺めていることに気づき、私は思いきり顔

を逸らした。

一日は二十四時間というけれど、実際に生活する一日はそんなに長くない。

そもそも三分の一くらいは寝ているわけだし、家を出て活動している時間といったら、それこそ全体の半分程度だろう。

今日だってそうだ。榊と二人っきりで居辛い時間があつたと思えば、いつの間にか部員たちは集まり、文化祭が始まる前に最後のリハーサルを済ませ、昨日に続き二回目の開会式に出て、演劇以外にも使われる講堂から大道具を運び出すと、開演まで自由時間となつた。自分たちが見る側になつて文化祭を楽しんでいれば時間はあつという間に過ぎてしまい、やがて夕方と呼ばれる時間帯になる。

同じ部員やクラスメートと出し物を見て回っていた私は、再集合時刻より早めに引き上げて控え室にやつてきた。

いつもは普通のホームルームとして使われている教室だけれど、机と椅子は端に寄せられ、大道具や小道具が運び込まれている。それらに囲まれるようにして、部屋の真ん中では部員たちが固まつて談笑していた。その中には支倉の姿もあり、緊張した面持ちに笑顔を浮かべようと頑張っている。

集合時刻まで残り五分。来ていないのは、あいつ一人だけだ。「どこに行っているのかしら」

ずっと思っていたことが、ついに口を突いて出てしまった。

裏方ならまだしも、あいつは役者の一人だ。小規模な部だから代役なんていないし、絶対に居てもらわなくてはならない。

「きつと時間までには来るよ。こっちで座つてよ？」

いつの間にか傍に立っていた支倉が、私の制服の裾を引きながら言う。視線が合うと、彼女はにっこりと笑ってみせた。

「何してるのかしらあいつは」

「分からないけど……」

教室の時計と、自分の腕時計を見比べる。もう何度も繰り返している行為だが、そうしたからって何も起こらない。二つの時計は同じ時刻を示しながら、着々と時間が過ぎていくことを私に伝える。腕時計の秒針が頂上を過ぎた瞬間、私は居ても立ってもいられなくなつた。

「ちよつと見てくる」

そう言つて駆け出すと、一瞬だけ服の裾が持つていかれ、すぐに解き放たれる。支倉はまだ私の上着を掴んでいたのだろう。振り払うような形になつてしまったことを申し訳なく思いつつ、教室のドアへ向かう。

引き戸を勢いよく開ければ、廊下を歩いていた一般客が何事かとこちらを見た。彼らからすれば、血相を変えた女子生徒がいきなり飛び出してきて驚いているのだろう。

しかし、そんなことに構っている暇はない。自分を振り返る人々の中にあいつがいないことを確認してから、廊下を駆けた。

人が多いから全力疾走とはいかないけれど、かき分けるようにしてひた走る。

時々スカートが翻るが、そんなことを気にしている場合ではない。そりゃいい気分はしないが、見られたところで減るものでもなし。それよりも大切なのは、今という時間だ。

階段に差し掛かり、一段ずつ降りる。ここは校内でも特に混雑する場所だから、一段飛ばしで行くのは諦めた。

再集合時刻をギリギリまで詰めたのは神だ。私はもう少し余裕を持たせたらどうだと言つたのだが、あいつは「皆の自由時間になるだけ多くしたい」と言つて聞かなかつた。

「まあどうせ皆早めに来るだろうから」とも言つていた。確かに他のみんなはとくに集まっている。どうしてお前だけ来ていないんだよつ！

一階まで階段を降り、中庭に出る。正面には文化祭のために設けられたミニステージがあり、幕間なのだろう。その上を実行委員が

せわしなく動いていた。ステージの背景には、桜の樹が大きく描かれている。

「なんでこの季節に桜なんだか……」

どうでもいい事を口にしてから、ふと気付く。私はどこに向かうとしているんだろう。

榊がどこに行ったのか、アテがあるわけでもない。それなのに私は控え室を飛び出してここまで来てしまった。その間にあいつがフラツと戻ってきていることなんていかにもありそうじゃないか。

ポケットから携帯を取り出し支倉に電話をすると、彼女はワンコールで電話に出た。

「榊来た？」

支倉の声を待たずに訊ねると、答えはすぐに返ってきた。

『ううん、まだ』

「わかった。そっちに来たら連絡お願い」

『うん』

最低限のやり取りで通話を切り、中庭を見回す。学生服の人間はいくらでもいたが、あの憎たらしい笑顔だけは見当たらなかった。

あいつのことだ。どこかで道草をして集合時間を忘れているかもしれない。でも、万が一の事態も考えられなくはない。怒りやら不安やらでぐちゃぐちゃにかき乱された思考の中で、私は昼食のころを思い出した。

文化祭という日にわざわざ弁当を作ってきたのは自分ぐらいだったが、支倉たちは屋台で買ったものを持って、私が控え室で食べるのに付き合ってくれた。もちろん、一緒に食べた輪の中にはあいつもいる。

他の面子はみな女子だったから、いくら榊でもこれは居辛いかかな？ と私が心配する一方、本人はそんな事を気にも留めない素振りで「ほう、これはなかなか」

と感想を口にした。今どき恥ずかしくなるぐらいにしっかりと手を合わせて「いただきます」を言っていたのもやたら鮮明に覚えて

いる。

私たちが喋りながらぱくついている間も、あいつはたんたんとご飯を口に運んだ。私以外の皆は時々あいつにも話を振ったが、あいつは当たり障りのない返事だけをした。

そして一足先に食べ終えれば、やはり堂々と「ご馳走様でした」を言っ

「あとは婦人方で楽しい昼時を過ごしたまえ。五条君、箱は洗って返すからな。なかなか美味だったぞ。どうやら砂糖と塩の区別はつくらしいな！ ふははははは！」

声高らかに去っていったのだった。最後の一言と笑い声はどう考えても不要だった。

あいつが行きそうな場所を想像してみるが、思考をめぐらせるほど、数時間前のその事が蘇る。

どうしてこんなにも印象に残っているのだろうか？ と、そんなことを考えてみる。

きっと、意外だったのだ。いつもは私のことをからかうあいつが、女子に囲まれて黙々と箸を動かす姿が。文句ひとつ言わずに女子の輪に加わっていたことに、微笑ましい不器用さを感じていた。

可愛らしい？

そんなことを言っ

てはいけない。何が何でも私は変人が嫌いなんだ。
とにかく今は、余計な考えは捨て置こう。そう言いかせて気持ち

を切り替えようとした瞬間、
ポンッ！

中庭をぐるりと囲む校舎の向こうから、そんな音がした。

どこか間の抜けた爆発音の聞こえた方に視線を向けると、小さな煙が風に流されて消えるところだった。……花火だろうか？

中庭にいた人々は一度はそちらに目をやるが、またすぐ何事も無

かったかのように動き出す。けれど私だけは、それに何か引つかかるものを感じた。

支倉からの着信はまだ無い。私は煙の見た方に向かって走り出す。

中庭を突っ切り、校舎を抜けたその先は、グラウンドの端に当たる場所だった。出し物があるわけでもなく通り道でもないので、文化祭の日といえど人の気はほとんど無かった。

外部の客がちらほらと迷い込んで来ている程度で、それらしき人影も見当たらない。スピードを緩めないまま、私はさらに奥……普段は閉鎖されているトラック搬入用の門へと走った。

すぐその曲がり角に差し掛かる。この先に居なければ、私にはもうなすすべもない。思わず目をつむってしまいたくなるような心持ちでそちらを見ると　いた。

三人の生徒。そのうち二人が実行委員の服装をしていた。彼らではないもう一人の人間こそが、榊行貞だった。

そいつらの足元にはよく分からないモノが転がっていたが、どうせろくなものではないだろうし今はそれどころじゃない。

「何してるんだよッ！」

あいつだと分かった瞬間、そう叫んでいた。正確に言えば、叫んだのが聞こえてから、やっとそれが自分の声であることに気付いた。手元にボールや石があったら、躊躇うことなく投げていた自信がある。

弾かれるようにこちらを振り向く榊。その顔には珍しく、驚きの表情が浮かべられていた。自分が悪いんだざまあみろ、と心で呟く。そして榊はというと、気付いた頃にはこちらに向かって全力疾走していた。腕を大きく振り、陸上のトラックを走るかのような冗談抜きのフォームだ。あいつは私に近づいてもスピードを緩めようとせず、立ち止まる私の横をそのまま抜いていった。

「急げ五条君、まだ間に合うぞ！」

すれ違いざまにそんな事を言ってくれる。

「なによ、自分が忘れていただけでしょ!？」

私も百八十度向きを変えて、榊の背中を追う。距離の縮まらない背中に言葉をぶつけるが、あいつは走りながらこう答えた。

「断じて忘れてなどいないぞ! あの場合から控え室までは走って一分と掛からないのだ!」

「もつと余裕を持ちなさいよバカ!」

「すまない! 自分もまさか五条君が探しに来てくれるとは思わなかった!」

人ごみをかき分けながら大声でやり取りをする。

必然的に周りの人々の視線が集まるのだけれど、その大半が後ろを走る私に向けられた。先に走り去ってしまう榊にはほとんど目が行かない。どうして私だけこんなに恥ずかしい思いをしなくちゃいけないんだ。話そうとする度に振り返るその顔がいちいち楽しそうに笑っているのも気に食わない。

行き以上のスピードで校舎を抜け、中庭を横断し、建物の中へ飛び込む。階段を上りきった頃には、私の息は完全に上がっていた。

ちょうど私が部屋の入り口に着いた瞬間、一足早かった榊が引き戸を開ける。中にいた皆が一斉にこちらを見たのが、榊の背中越しに分かった。

部員たちの中、携帯電話の画面に目を落とす支倉がぼつりと呟く。
「……えっと、集合時刻ジャストです」

それを聞いた瞬間、周りの皆はまるで何かを当てたみたいに歓喜の声を上げた。拍手や指笛までもが教室に響く。

「全然ちつとも喜ばしいことじゃないでしょうが!」

叫んでみても、皆は笑うばかり。どうしてくれるんだという意味をこめて榊を見たのだが、こいつは自信満々な表情と共に親指を立ててみせる。

とりあえず、演技に支障が出なさそうな程度に殴っておいた。

そこからの作業は多忙を極めた。

講堂でやっていた前の出し物が終わると、まず部員全員が軍手を着けて大道具を運び込む。

二日開催である文化祭は、一日目が土曜、二日目日曜だ。当然のことながら、日曜日である二日目の方がどこも客の入りは多い。つまり、廊下もそれだけ混雑しているのだ。予想の範囲内ではあるが、控え室と講堂の行き来は昨日よりもてこずった。

そしてもちろん、演劇を見ようと講堂に来てくれている人の数も一日目より増えていた。前日よりも目に見えて席が埋まっていたので、私と支倉は思わず顔を見合わせて笑う。

大道具の準備が整ったら、今度は役者たちだ。当初はカーテンなどで仕切るはずだったのに、この期に及んでそんな暇はないとみんな舞台袖で着替えてしまった。

「緊張するね」

隣に立っていた支倉が呟く。

「あなたは舞台に立たないじゃない」

「そうなんだけど」

でもやっぱりね、と自分の胸をさすりながら苦笑いを浮かべた。

照明などの係は持ち場の確認へ行っている。既に着替え終わった部員たちが舞台袖でそわそわとしている中、私と支倉だけは制服のままだ。

そのかわり、二人の手にはホチキスで綴じられた台本がある。夏休みよりも前から使い続けて、すっかりボロボロになった。けれど、それが手に心地よく馴染む。

脚本を担当した支倉、そして、監督を受け持った自分。私たちは舞台の両袖に分かれて役者たちの補佐をすることになっている。

舞台に立って演じることは楽しい。けれど、劇そのものを一から組み上げてみたいというのが私の夢だった。今年になってそれが叶った。昨日だって、終演後には背中の中ぐくぐくが止まらなかった。そして、今日がフィナーレだ。

袖から舞台を見る。今は幕が下ろされていて真っ暗だけれど、これからあの場所には煌々と明かりが降り注ぐ。そこで行われるのは、すべて私たちが手がけたものだ。

準備を急いだおかげで、開演時刻までは少し余裕があった。役者たちにとつて、この時間は貴重だ。長すぎても良くないのだけれど、これがないと心を落ち着かせるタイミングを失ったままで劇が始まってしまう。

開演まではあと五分もない。しかし、劇そのものはその何倍もの時間があるのだ。こんな時から変に緊張つていては、終演まで持たなくなってしまう。

支倉にはあんなことを言ったのに。なんだ、自分だって

「緊張しているようだな五条君」

……このタイミングで実に邪魔な人物が邪魔な声を掛けてきた。ここに来てまで私はムカつかなくてはいけないのだろうか？

「あんたには無縁な心情でしょうね」

ステージに目を向けたまま言葉を返す。隣にいたはずの支倉はいなくて、その代わりにこいつの嫌な気配を感じた。

「手厳しいな。こう見えて自分も緊張ぐらいするものだぞ」

そう言うので、どんな顔をしているのかと榊の方を見てみれば、なんのことはない。ヘラヘラというか何というか、普段どおりの笑顔を浮かべているじゃないか。他人から見ればこれは爽やかに思えるらしいが、私にとってはそうではない。

「よく言うわよ」

もう見るまいと舞台に目を戻すが、榊はまだ引こうとしなかった。「まあそんな事を言わずにだな。せっかく全員を集めたのだから五条君も話を聞いてくれないか」

「全員？」

振り返ってみると、榊をはじめ全ての演劇部員が私を見ているじゃないか。部員たちは一箇所に固まっており、あとは私を待っているらしい。

一足先に歩き出していた榊は、部員たちの前に立つ。私は小走りでその集団へ向かうと、その一番後ろに加わった。舞台袖ということもあって、肩と肩がぶつかるぐらいの密度で集まっている。

間もなくして前の方から支倉がやって来て、笑顔を交わしてから私の隣に並んだ。

「これは何のための集まり？」

支倉にそう訊ねても、

「さあ……話があるとは言ってたけど」

と彼女も首をかしげるばかり。

他の部員も同じのようで、皆の頭上には疑問符が浮かび上がっているような状態だった。

呼び出した張本人はそんなのもお構いなしに、私たちの顔を見回す。そして満足げに小さく頷いてから、言葉を発した。

「開演の直前で申し訳ないのだが、なんだか語りたい気分になったので集まってもらった」

いきなりの自己中発言に、自分の口から思わず溜息が漏れた。それを見た支倉が横で苦笑する。

「だが、まあ、学校の歴史から十二年間も消え去っていた演劇部を復活させた人間なのだから、それぐらいは許されるだろうと勝手に解釈した」

堂々とのたまう榊に、部員たちから小さな笑いが起こる。

けれど、私はそれどころではなかった。

「……復活させた人間？ あいつが？」

支倉に訊ねると、彼女は私以上に驚いてみせて言う。

「えっ、知らなかったの？」

目を見開きつつ小声で訊き返してきたので、私は頷いた。

演劇部が復活したのは私たちが入学する一年前のこと。それは知っているが、その発起人が榊だった？

つまり、あいつがまだ一年生で入学したての頃にこの部を作ったということだ。私が入部した頃、なぜ二年生が部長なのかと疑問だ

ったが、あいつは恐らくその一年前から部長だったのだ。

「支倉は誰から聞いたのよ」

「えっと、最初に知ったのは一年生の時で、三年の人たちから教えてもらったよ。でも、部長だってよく言ってたでしょ、『自分の演劇部』って」

「そうだけど……」

あいつの言うことだから、冗談のようなものだと思っていた。あいつがそう口にする度に、部長になったぐらいで自分の所有物気取りかと顔をしかめたものだ。しかし、まさかそういう意味だったとは。

入学して間もない一・二ヶ月といえば、私が恐る恐る隣の席の子に声を掛けていたような頃だ。演劇部にもすぐに入部届けを出していたが、打ち解けるには至っていなかっただろう。

同好会やクラブの創設と昇進は、五月までに行われる。そんな時期からあいつは人を呼んで創部を申請したというのか。発足時からいきなり部だったと聞くから、かなりの人数を集めたはずだ。

今も部員たちの前で冗談を飛ばして笑いを取っている榊。そいつの知るべき事実を、私は今更になって知ったのだった。

「部活というのは不思議なものだ。授業のクラスのように同い年を無造作に集めたわけではなく、だからといって会社のように営利を追求する組織でもない。我々は純粋に、演劇というただ一点で集まった集団だ。共通するのはそこだけで、色々なものを持った人間がここには居る。普通だったら自分と会話する機会さえ無いような人種とでも、ここでは演劇という目標が繋ぎとめてくれる。これほど愉快で素晴らしい集団があるだろうか？ 自分をを変人呼ばわりする人間が弁当を作って来てくれるんだぞ？」

全員が含み笑いと共に一斉に私を振り向く。しかめ面を作って言葉を投げつけてやりたかったが、思わず視線を斜め下に落としてしまった。

それに、しかめ面をしたところで文句を返せる気がしない。頭の

中でいろんな物がぐるぐると渦巻いているせいで、私が普段あいつに向けていたような言葉を見失ってしまった。

あいつはいつも笑っていた。人をおちよくるための仮面なんだろうと、私はひねくれた解釈をしていた。

でも事實はそうじゃなくて、あいつは本当に楽しくて笑っていたとしたら？

本来なら話す機会が無い人間とも、ここでは一緒にいられると言っていた。それが愉快で素晴らしいとも。あいつに対して腹を立ててばかりの私だったけれど、それを受け入れた上で笑顔でいたのだとしたら？

「さて、話をこれからのことに戻そう。昨日は上出来だったし、客の反応も良かった。本音を言えば、今日だって失敗は出来る限りなくしたい。だが、そればかりに気を遣うのも面白くない。せっかくのファイナーだ。客にとってもそうかもしれないが、我々においては言うまでもない。このメンツで演る最後の劇なのだから、どうせなら楽しんで欲しいと思う。我々はこの学校の中で最も演劇を愛し、練習し、一生懸命になったプロフェッショナルだ。本業を行っている間ぐらい、堂々と構えていようではないか。……もし、堂々と構えすぎて台詞が飛んでしまった時は、舞台袖にいる監督の顔を見るといい。五条君は思っていることがすぐ顔に出るから」

皆がどつと笑う。隣に立つ支倉までもがこの時ばかりはお腹を押さえて笑っていた。

私は顔を熱くしながら榊をキツと睨み据えるが、

「なんでさっきから私をつ

情けないことに、言葉に詰まってしまふ。それを見てさらに部員たちが笑う。

でも不思議なことに、起こった感情は不愉快ではないのだ。恥ずかしいと思う中に、微笑ましさのような暖かい気持ちがあった。

劇は好調に進んでいった。

昨日の公演でも目立ったミスはなかったのだが、今日はそれに増して皆の表情に活気が溢れている。二日目で慣れてきたというのもあるだろうけれど、開演前のあいつの話のおかげもあると私は思う。喋った張本人はというと、こいつもこいつで生き生きと舞台の上に立っていた。日常生活でさえ恥らうという行為を知らないような人間なので、ある意味この部にはぴったりなんじゃないだろうか。支倉もあいつ専用の役を上手に書いたもので、普段はイライラにしかない言動も劇中では全てが笑いを誘うものへと変化している。目の前で行われているのはこれまで何度も見てきたやり取りだけれど、実際に客の反応がつくと全てが新鮮に思えた。

榊が動いて声を出せば、また客席から笑い声が聞こえてくる。その反応に、あいつはほんの少しだけ口元を綻ばせた。

ああ、楽しんでるんだな。素直にそう感じた。

考えてみれば、あいつは誰よりもこの部活を好きでいたんじゃないだろうか。開演前にあいつが喋った事が本心なら、これまで見せていた笑顔が本物なら、これは間違いない。だって、この部を作った人だ。他のどの部員よりも沢山のことがあったはず。

今朝だって、部で一番に登校していたじゃないか。私が講堂に顔を出したあの時、どういう気持ちで大道具に囲まれていたのか、やっと分かった気がした。

劇の幕が閉じたら、最後は制服を着た私たちもお客さんの前に立った。いわゆるカーテンコールだ。

割れんばかりの拍手の中には知っている顔も沢山あって、私は思わず手を振り返してしまった。支倉と一緒にお辞儀をしたとき、私たちには沢山の視線が向けられたはずなのに、私が感じるのは緊張や照れではなく喜びだった。

頭を上げてからふと思う。あいつにとってはどうだっただろう。このフィナーレをどんな風に感じているだろうか。

ところが、そんなことは考えるまでもない事だとすぐに分かった。斜め後ろを振り返れば、不敵な笑みと共に親指を立てる姿があったのだ。普段と変わらないその表情に、私は思わず苦笑してしまった。舞台を引き上げれば、役者たちは口々に喜びを言葉にし、手を叩いたり抱き合ったりをはじめめる。そこにほかの裏方も加わって、薄暗い舞台袖はさらに盛り上がった。

そんな群れの一番後ろに、誰とも言葉を交わさずに歩く姿を見つけた。その顔には満足そうな笑みが湛えられていて、一人で浸りたいものがあるんじゃないかとも思ったが、私はやっぱり話しかけることにした。

「えっと」

「おう、五条君。……いや、監督と言っておこうか？ ご苦労様だったな」

「え？ うん、まあ」

向こうから話しかけられて、私は言葉に詰まってしまふ。

「これで我々は引退だな。変な先輩が消えるからせいせいするだろう？」

自分でそう言っておきながら、ふははははと笑い飛ばす。やはり変人であることには変わりないなと思った。

「しかしだな、自分があんな風にやりたい事をやりたい放題にできたのは、しっかり者の五条君がいてくれたからだ。感謝するぞ」

「自覚してるなら少しは自制を利かせなさいよ」

条件反射で突っ込みを入れていた。いつもと変わらないやり取りで、私は少し安心する。

すると榊は少し考えるような素振りを見せ、

「まあ確かにもっともな意見ではあるが……それでは面白くないだろう？」

と笑うのだった。

こいつの判断基準は全て面白さにあるらしい。思わず溜息が出るが、ムカムカした感情は湧き上がってこなかった。

「きつとこれで丁度良かったのだよ。五条君こそ、榊という人間が
すること全てに否定的だったわけではなかるう?」

「そーですね」

今までにこいつがやってきた事にいちいち腹を立てていたのが馬
鹿らしくなって、私はいいい加減な返答をした。

そして、ちゃんとやっておきたかったことを言うために私は立ち
止まる。一歩遅れてそれに気付いた榊は、足を止めてこちらを振り
返った。

「あの、先輩　ありがとうございました」

カーテンコールの時と同じかそれ以上に、しっかり頭を下げる。

視界には、舞台袖の床と自分の脚だけが映った。

「そうか」

少しの間を置き、頭の上のほうからそんな声が聞こえる。

顔を上げてみれば、相変わらぬの不敵そうな笑みを浮かべる部長
の姿があった。

「どういたしまして　　と言っかわりに、どうだろう。花火でも見
ないか?」

「花火?」

思わず訊き返すと、榊はそうだと頷いた。もちろん、楽しそうな
顔のままだ。

「いつの話よ」

「もちろん、今からに決まっている。この文化祭を締めくくる大花
火だ」

話を聞けば、この後学校で打ち上げ花火が上がるらしい。日没を
待って始まるとのことだ。

「花火なんてパンフレットに書いてなかったと思うけど」

控え室に戻りながら私が呟けば、

「そりゃ書いてないだろうな」

まるで当たり前のように答える。

「まあなんだ、本番前に君を走らせたお詫びとでも言うておこう。」

ネタばらしと言った方が正しいかも知れんがな
そう言ってやはり笑うのだった。

<第1演目：演劇部 「嫌いな笑顔」 f i n >

第2演目：吹奏楽部 「君に捧げる歌」

客の入りは上々といったところだ。

去年の今頃はこんな風に悠々と確かめる暇がなかったので比較はできないが、昨日の来客ペースを見る限り、入場者数の記録は今年も塗り替えられるだろう。

二日目の今日だって、人の入りにくい午前中からしつかり賑わっていた。開門から一時間と少ししか経っていないにもかかわらず、校舎の中には他校生や受験生と思われる人々で溢れている。中には小さな親子連れさえも目についた。この近所に住んでいるのだろうか。

彼らのほとんどは二人や三人のグループで歩いている。そりゃあ確かに、よその学校へ一人で来ようとする人は珍しいだろう。この学校の生徒でも、一人で回ることを好む奴はそう居るものではない気がする。

俺だって四六時中誰かに傍にいて欲しいわけではないけれど、こんな状況に気付いてしまつと少しは心細い気もした。

昨日はまだ、クラスメートの連中と一緒にいたのだ。

どうせ最後の文化祭だ、見て回ろうぜ。そんな風に言いながら、校内をぶらぶらと練り歩いた。いまだかつて客として文化祭を体験したことがなかったので、ゆっくりと雰囲気を楽しむことができたのは素直に楽しかった。

ところが、何だか味気ない気分がしたことも事実だった。

ほとんどの三年生は部活動も引退しているため、実際のところ準備にはあまり関わっていない。となるとほとんどビジターのようなものだった。自校の文化祭とはいえ、何ヶ月も前から下積みをしてこそ、自分たちが主役だと感じることが出来る。

一緒に回っていた奴らも同じ気分だったらしい。屋台で適当に食べ物を買って食いついて、昼過ぎには学校を出てしまった。

そして二日目の今日。

俺は学校の中を歩いてた。昨日つるんでいたクラスメートはもう帰ってしまったのに、自分だけが懲りもせず学校に居続けている。自分でも分かってる。未練以外の何ものでもない。

去年はあれだけ慌しく走り回っていた文化祭を、今年は何もせずに通り返してしまふ。それが寂しくて仕方ないのだ。

こうして一人歩いていることでどうにかなるものでもないけれど、他の友人たちのように開会式を終えて早々に学校を去ることだけはできなかった。

一年前の文化祭は、それはそれは忙しかった。当日の一週間前なんて、家に帰れたのは日付が変わりそうな時間だった。

しかし、それは同時に楽しくもあつた。一日の終わり、横になつて目を瞑った瞬間には、これ以上ないほどの満足感を味わっていた。あの時の自分は、ものすごくキラキラした何かを持っていたような気がする。

今の自分も、そんなキラキラを探しているのだろう。まだどこかに自分の掴めるものが残っているんじゃないか。破片でもいい、そんな欠片を見つけたかった。

中庭のミニステージは、既にこの時間から賑わいを見せている。午前中というのは外部の客が少ないから内輪だけで盛り上がりがちなのだが、そんな恒例を打ち壊すかのような客の引き寄せようだ。きっと、今年の実行委員長がその辺りを考慮したのだろう。あいつは去年から頭の切れる奴だった。

実行委員のマイクを通してこもった声が、校舎に囲まれた四角い空間に響く。それに背を向けて、建物の中へ足を踏み入れた。

上履きに履き替える必要がないのも、文化祭の最中であることをさりげなく実感させる一つだ。土足のまま昇降口を上がり、すぐ近くにある階段へ向かう。

校舎には入ったものの、別段見たいと思う企画があるわけではない。だから一階の廊下へは進まなかったのだが、それじゃあ自分はどこへ行こうとしているんだろうか。

階段を行きかう人々の隙間から、何枚かのチラシが目に入る。見回してみれば、そこらじゅうの壁という壁にはチラシが貼られていた。サイズは統一されているものの、足元からずつと高い場所まで好き勝手に散らばっている。中にはどうやって貼ったのか、天井にぶら下がった紙もあった。

これだって文化祭ならではの光景だ。矢端高校は一昨日の準備日から、こういった空気で溢れている。それなのに、自分の周りだけは目に見えない温度差がある気がしてならなかった。

そんな中で声を掛けられたのは、ちょうど二階へ上りきった時のことだった。

「都築先輩？」

喧騒の中でも綺麗なアルトを響かせる。その声だけで、記憶の中の一人とすぐに結びついた。

振り返れば、やはりその姿がそこにいる。何段か下からこちらを見上げていた。

「北条か」

名前を口にとすると、彼女は口元に微かな笑みを浮かべて階段を駆け上がってきた。着ていたハッピが翻る。他の実行委員と色違いなのは、委員長である証だ。

「昨日はちゃんと寝たか？」

並んで歩き出した北条に言うと、彼女はわざとらしく顔をしかめる。

言わずともお互い分かっているのだ。文化祭の期間中に、実行委員長がまともな睡眠を摂れるはずがない。

「労働基準法で定められているよりも倍以上の時間働きましたよ」

北条はそうやって苦い顔で愚痴りつつも、下地となっている表情はやはり笑顔だった。だから、こちらからも笑い返してやる。

「せいぜい過労死しないようにな」

「明日からは思い切り寝てやります」

ニヤリと不敵な微笑を浮かべながら北条が言う。どっしりと構えた雰囲気を感じさせるのがこいつの特徴だった。同時に仕事能力も高く、つまりは切れる奴なのだ。

身内にそういう人間がいると頼もしいもので、去年の実行委員の中でも群を抜いて重宝した人材だった。それが今年文化祭を取りまとめる役になったのだから、今日のこの時間から盛り上がりを見せているのも納得がいく。

それらを象徴するように、北条の歩く姿は颯爽としたものだった。

そしてふと、その後ろを付いて歩く一人の生徒を見つける。

実行委員のハッピを羽織った男子生徒だ。視線をハッピから顔に上げれば、当たり前前のように視線がかち合う。向こうが一瞬だけ体をこわばらせるのが分かった。

俺の視線の先に気付いた北条は、ニヤツと笑いながら男子生徒の襟首を引っばって俺との間を歩かせた。

その対応を見るに恐らく彼は後輩なのだろう。ぺこりとお辞儀をしてから、おずおずと喋りだす。

「あ、えっと、はじめまして。一年の」

「こいつ、私の奴隷です」

「桐生といいます　って、えええっ!？」

自己紹介の途中で放たれた北条の宣言に、その男子は泣きそうな顔で彼女を振り返った。

「それじゃあ私たちはこの辺で」

そう言っただけで軽く会釈をしてから、北条はすぐさま連絡通路の方へと足を向ける。

「お、おう」

一拍遅れてこちらでも軽く手を挙げて応えるのだが、

「せんぱいっ！　確かに今までさんざんこき使われてきましたけど、

奴隷ってなんですか奴隷って！」

一年の実行委員は襟首を掴まれたまま引きずられる。彼は眉を思いきりハの字にした困り顔なのだが、一方で北条は嬉々とした表情をしていた。

北条たちと別れてそのまま廊下を突き進んだ先にあったのは、音楽室だった。

科目選択の関係で音楽の授業は受けたことがないので、この教室とはあまり縁がない。この階に音楽室があったことさえ、呼び込みの声を聴いてやっと思い出した程だ。

ドアは開け放たれていたので、遠くから中の様子を覗いてみる。普段この部屋で使われているらしい椅子が、何十個も等間隔に並べられていた。そこに一般客や生徒が座っているのがちらほらとうかがえる。

段々になった部屋の前の方には椅子がなく、ぽっかりと空いたままだった。見たところ、どうやらそこをステージ代わりにして発表をするらしい。

中にいる人の少なさもあってか、部屋の中は静まり返っている。同じ学校の文化祭だというのに、その雰囲気は中庭とまったく異なるものだった。

興味本位で顔を覗かせてしまったが、どうにも自分には気の引ける場所だ。そもそも自分は、音楽にほとんど馴染みがない。

入り口の傍に立っただけでも冷やかしくなってしまう。そう思って踵を返すのだが、振り向いたところで何かが肩にぶつかった。

「あたっ」

目線の高さには何も見当たらない。しかし、ちょうど頭ひとつ分ほど低い場所まで視線を下げると、そこに女子生徒の顔があった。そいつはよろめきながら二・三步後退し、くしゃっと顔をゆがめる。片手で自分の額を押さえている様子からして、俺の肩はそこに

ぶつかっただらいい。

「えっと……ごめん、大丈夫か？」

恐る恐る訊ねるとそいつは顔を上げ、苦笑いを浮かべて答える。

「はいっ、平気です。というより、私こそ近づきすぎてごめんなさいっ」

左手を額に置いたまま、ぺこりとお辞儀をするのだった。

適度に距離が離れたところで、あらためてその女子を見る。

背はだいぶ低めな方だろう。制服の袖が余っていそうなタイプだが、実際はそうでもなかった。

肩に触れない程度にカットされたショートヘアは、髪質のせいなのか、ほわほわした印象を受ける。立ったまま俺と向かい合う今は、彼女はこちらの顔色をうかがうかのように不安そうな目でこちらを見ていた。

つまり一言で表せば、小動物みたいな奴だった。びくびくしながら俺の反応を待っているものだから、まるで俺がこいつをいじめているみたいで少し気まずい。とりあえずこの空気はどうにかならないかと、口を開いてみた。

「穂ノ瀬　だよな？」

その苗字を口にしたとたん、彼女の顔がぱつと明るくなる。

「は、はいっ！　覚えていてくれたんですね？」

「クラスメートの苗字くらいは普通覚えていると思うが……」

振り返って顔を見たときから、ちゃんと分かっていた。一見中学生かと思うような容姿だが、こいつは同じクラスの穂ノ瀬だ。苗字くらいはと言ったけれど、下の名前だって覚えている。

どうして覚えているのかだが、別にクラスの女子全員の名前を覚えているわけではないし、彼女に特別関心があるのでもない。ただ、穂ノ瀬の自己紹介がやけに印象的だったから記憶に残っているのだ。新年度になって間もない頃。学年とクラス編成が変われば、クラス全員が軽く自己紹介を行うのはもはや恒例行事だろう。出席番号順に名前と趣味などを挙げていく。苗字が都築の俺は中盤あたりで

自分の番を済ませ、あとはなんとなく聞き流していた。
そして穂ノ瀬の番。彼女は、席から立ち上がると震える声でこう言った。

ほ、穂ノ瀬なのですっ

最初に聞いたときは、どんな喋り言葉だと思った。変な奴と一緒にのクラスになっちまった、とも思った。

しかし、その発言はそういう意味ではなかった。“なのです”が一つの文節ではなく、その前半部分の“菜乃”というのが彼女の名前だったのだ。

俺をはじめ、穂ノ瀬と同じクラスになったことのない連中は皆同じ勘違いをしたらしい。直後、本人が説明を付け加えると、クラス中は笑いで満たされたのだった。

「それでも、都築くんが覚えていてくれて嬉しいです。たまたま見かけたので声を掛けようか迷っていたんですが、都築くんがわたしを知らなかったらどうしようと思って……だから、ありがとうございますっ」

しっかり頭を下げるお辞儀をするので、こちらもつられて会釈をしてしまう。政治家でもあるまいし、名前を覚えられることはここまで感謝されるべきものなのだろうか。微笑ましい姿はあるのだが、何だかこちらが申し訳なくなる。

「いや、だからそんなに大したことでは」

言いかけて、穂ノ瀬が持つ銀色の棒が目に入った。さっきは左手で額を押さえていたが、右手でその棒を握っているのだ。

ボール？ ……にしては輝きすぎている。確かに長さは同じくらいだが、その棒には丸っこい板をはじめ、細い部品がいろいろくっついていた。

「あ、これですか？」

俺の目の先を追った穂ノ瀬が、銀色の棒を胸元へ引き寄せる。よ

く見てみると、棒は管状だった。その隅っこに、丸い穴がぽっかり開いている。

「フルートっていうんです。見るのは初めてですか？」

「あー、名前ぐらいは知ってるけど」

こんな間近で目にする機会が今までにあるはずもなかった。

ベースになっっているのは筒状の金属のようだが、それに細かいパイプがたくさん組み込まれている。触るだけでそれらがポロポロと取れてしまうような気がして、正直、穂ノ瀬が片手で軽々と持っているのが信じられなかった。

演奏するためのものであることは知っているが、こうして見ると何かの精密機器みたいだ。ボールか？　なんて思ったのはこのどいつだろうか。

「……楽器だよな？」

思わずとんちんかんな事を口走るが、穂ノ瀬はそれに嫌そうな顔もせず、

「はい、楽器ですよ」

と言って少し恥ずかしそうに笑ってみせる。

そこでやっと今自分が立っている場所を思い出し、穂ノ瀬の持つ楽器の意味を理解した。

「そうか、穂ノ瀬って吹奏楽部だったのか」

すると彼女は背筋をピンと伸ばしてから、楽しそうに「はいっ！」と答えて頷く。

“穂ノ瀬なのです”があまりにも強烈で忘れていたが、そういえば自己紹介のときに吹奏楽部だと言っていた気がしなくもない。

「といっても、三年生は事実上引退しているんです。今日はヘルプで呼ばれたんですよ」

好きだからこその部活なのだろう。フルートの話が始まった辺りから、穂ノ瀬の目はキラキラと光りはじめた。

「三年になっても大変なんだな」

銀色に輝くその楽器を見ながら呟いたのだが、

「でも、好きでやってますから」

穂ノ瀬はにつこり笑って答えた。

この学校で三年生といえば、この時期にはほとんどの人間が部活などから身を引いている。彼女のように三年生になっても文化祭に参加するのは僅かしかないけれど、正直それはうらやましいと思っただ。

三年生になってもといえば、同じクラスのあいつもそうだろう。いまだ部長の座に君臨しつづけているという、演劇部の榊。まあ、奴には穂ノ瀬のような微笑ましさは欠片もないが。それでも、未練がましく校内を歩くことなんて比べ物にならないほどに身の詰まった、キラキラした塊を掴んでいる。

穂ノ瀬だってその部分是一緒だ。自分より頭ひとつ分背が低かろうと、その小さな体の中には輝く何かが溢れている。

再びフルートに視線を落としていると、その放つ銀色の光が微かに揺れた。

「……あの、都築くん」

穂ノ瀬のおどおどした声が、かろうじて耳に届く。

ちゃんと聞こえるようにと穂ノ瀬は顔を上げるのだが、俺と視線がぶつかるなり縮こまってしまった。

少しでも緊張を除いてやれるかと思ひ少し笑ってみせると、彼女もそれにつられるようにして表情を柔らかにする。

「あのっ……」

そしてぐつとこちらを見上げると、今度ははっきりと言い切った。

「よかったら、聴いていつてくれませんかっ」

静まり返った音楽室に足を踏み入れることにあまり躊躇いはなかった。いかにも暇そうな男子学生が一人で入るのだから多少は居心地が悪いものの、穂ノ瀬に誘われたという名分を得たことで、気分的にはいくらか楽になっていた。

どうやら、穂ノ瀬と会ったときはまだ開場から間もなかったらしい。演奏会が始まったのは、席を取ってから二十分ほど経ってからだった。

ちなみに、それまでの待ち時間には入り口で貰ったパンフレットを読んでいた。前半のページには演奏する曲の紹介、そして後半は団員たちの紹介が書かれていた。読んだ限りでは、吹奏楽団は吹奏楽団でも、その中で楽器ごとにパートというグループに分かれているらしい。

パンフレットといっても文化祭全体のパンフとは違って、ただのコピー冊子だ。けれど随所に手描きのイラストが散りばめられていて、それなりに手の込んだものであることが見て取れた。

手作り感でいっぱいパンフレットから顔を上げ、音楽室を見回してみる。

はじめに音楽室を覗いた時に心の底で「ガラガラだな」と感じていたのが、まるで嘘のようだ。

用意された座席は既に埋まっており、座っているのと同じぐらいの人数が客席をぐるりと囲むようにして立って並んでいた。あれほど静まり返っていた空間は、人の数相応の騒がしさになっている。

音楽室に入ったときは窓際の席に腰を下ろしていたのだけれど、すぐ横に初老の女性を見つけてから席を譲った。そして、せっかくだから話を振ってみようと口を開く。去年や一昨年の仕事のおかげもあって、初対面の人に話しかけるのは慣れているのだ。

「ご家族が演奏されるんですか？」

訊ねると、その人はにこやかな顔で首を横に振った。

「一人ということは、あなたは彼女さんの晴れ舞台でも見に来たのかしら」

違いますとはっきり否定したのに、彼女は目を細めてこちらを見るばかり。絶対に誤解していると思ったが、話を進めるために黙っておいた。

「顔見知りが出るって訳じゃないんだけどね、毎年楽しみにしてい

るのよ」

「この演奏をですか？ と訊けば、その女性ははつきりと頷いた。「吹奏楽もそうだけれど、この文化祭そのものが、かしら。何というかはら、こういうところに来ると若いパワーを貰える気がするじゃない？」

見た目は落ち着いた雰囲気の人だったが、意外とおてんばな面もあつたようだ。パワーと言ったところで、ぐっと両腕を曲げてみせる。

「……って言っても、現役の学生さんには分からないかもしれないわね。そのうち身をもって知ることになるわよ」

そう付け加え、茶目っ気のある笑顔を浮かべる。老いを忘れたかのようなその表情を見ていると、言っていることはもっともな気がしてきた。

音楽室の中に拍手が響く。前に顔を向けると、二年生の女子がステージ中央に立っていた。活発そうな雰囲気、はきはきした子だった。司会者だと名乗ってお辞儀をすれば、再び拍手が送られる。

演奏は、司会による曲紹介を挟みつつ行われていった。

何個かの楽器が集まって演奏することをアンサンブルと言うらしい。それをパートごとにやるから、ふたつの単語をくっつけてパートアンサンブル。この演奏会はそのパートアンサンブルというのがメインのようだ。

パンフレットの後半部分に載っていた、パートごとの紹介を見してみる。『サククスパート』と書かれたページにある写真には、六人の顔が映っていた。顔を上げてみれば、まさにその六人がたったいま出番を迎えて入ってくる。

パンフの上では皆笑っているが、目の前の彼らは緊張した面持ちだったり、かと思えば、写真と同じかそれ以上に楽しそうな笑顔を浮かべている人もいた。

同じパートの六人は並んでお辞儀をすると、それぞれ用意された椅子に座る。楽譜を整えている間に拍手は収まり、演奏の準備が整

った。

六人が顔を上げ、視線を交わす。リーダーの女子が少し楽器を振るだけで、全員の呼吸がぴったりと揃う。

そんな刹那の疎通を見るだけでも気持ちの良い寒気がぞくぞくと背中を駆け上がるのに、直後には彼らの演奏が続くのだ。まるで同年代とは思えない奏者たちの姿に、ただただ釘付けになってしまった。

演目は重ねられ、やがて、司会者の口から彼女の名前を耳にすることになる。

「次は、これまでのパートアンサンブルとは色を変えまして、フルート一本の音色をピアノ伴奏でお楽しみ頂きたいと思います。」

幕間にプログラムを眺めていたのだが、フルートという単語に思わず顔を上げる。

フルートのアンサンブルは三曲ほど前にあった。しかし、そこに穂ノ瀬の姿は無かった。となると、出てくるのはここじゃないだろうか。

「お送りする曲は、メンデルスゾーン作曲『六つの歌曲 作品34』より『歌の翼に』です」

司会者の女子生徒は、開演直後よりも心なしか緊張のほぐれた様子だった。はじめは原稿に目を落としてばかりだったのが、今ではちらちらと客席を見る余裕が生まれている。

「メンデルスゾーンは十九世紀に活躍したドイツの作曲家です。彼が書いた曲の中でも、これなら誰もが知っているのではないでしょうか？」

喋りながら舞台の端にあったピアノに歩み寄る。片手を鍵盤の上に置いて、やや低めの音を四回連続で鳴らした。

司会者は一旦そこで手を止め客の反応をうかがう。一般客の中に、頷く姿がちらほらとあった。俺には何の曲か分からなかったが、彼女は他の客の感触を得てにこりと表情を崩す。持っていた原稿を脇に置くと、今度は立ったまま両手で弾きだした。

想像していたよりもずっと量感のある、それでいて優美な空気が部屋に満たされる。そのメロディーには聴き覚えがあった。

ああこれ、結婚式の。

ふと見回してみれば、ほとんどの人が明るい表情でピアノに視線を向けていた。

彼女の演奏はなお続く。両手は鍵盤の上を器用に動き、華やかな音の重なりを生み出す。繊細な指が時には滑らかに、時には力強く踊っていた。

有名な冒頭を一通り弾き終えると、司会者はくりとこちらを振り返って背筋を伸ばし、

「ということで、結婚行進曲でしたっ！」

ぱっと小さくお辞儀をした。ほぼ同時に拍手が起る。

「これから演奏する『歌の翼に』も彼の代表作のひとつと言えるでしょう。本来は歌曲なのですが、今回はフルートによる編曲版でお送りします。フルートは三年の穂ノ瀬、そしてピアノ伴奏はわたし、二年の園宮が務めさせていただきます」

穂ノ瀬という名前を聞いた瞬間、背筋をぞくりとした感覚が駆け抜けた。緊張というか期待というか、とにかく居ても立ってもいられないような心地だ。

「それではお聴き下さい」

さっきよりも深めに頭を下げ、ステージ後方のドアへしずしと戻っていく。演奏者もそのドアから出入りをしているから、向こうはきっと準備室なのだろう。

司会者が完全に扉の向こうへ消えると、舞台の上にはぱつりと譜面台がひとつ残るだけだった。

一拍置いて、開かれたままのドアから別の女子生徒が姿を現す。

穂ノ瀬だ。

手には、さっきと同じフルートが握られている。しかしそのゆつたりとした歩みは、数十分ほど前に会話していた時のちょこまかした雰囲気は一切感じさせなかった。

後を付いてくるかたちで、司会者の子も再び姿を現す。司会のと
きに見ていた原稿は手にしておらず、代わりに楽譜の入ったファイ
ルを持っていた。見れば、穂ノ瀬の手にも同じ色のそれがある。

園宮と名乗った司会者は、ついさっき結婚行進曲を弾いたピアノ
の前に。そして穂ノ瀬は舞台中央の譜面台の前に立ち、揃ってゆっ
くりとお辞儀をした。追って拍手が広がる。

ゆっくり顔を上げると、司会者　もといピアノ奏者は椅子に腰
を下ろした。

ピアノは空いたスペースの隅あたりに置かれているから、舞台の
上には実質、穂ノ瀬だけが立っている状態だ。つまり、この音楽室
にある視線を、実質全て彼女が受けていることになる。

そのはずなのに、穂ノ瀬は柔らかく微笑んでさえいた。譜面台の
上に楽譜を広げた彼女は、両手に持ち替えたフルートを胸元に引き
寄せ、楽しそうに客席へ視線を向けている。

きっと穂ノ瀬は自己紹介の時のように、おっかなびっくりで人前
に立つものだと、自分はそう思っていた。

しかしどうだろう。まさかこんな風にゆったり構えられるとは思
わなかった。そこに立っているだけで格好いいと感じてしまえるよ
うな、そんな姿だった。

ピアノに向かった園宮の準備が整うと、穂ノ瀬はずっとフルート
を持ち上げる。構えた姿勢のまま、ピアノの方へと顔を向けた。互
いに視線を交わし、小さく頷く。

銀色に光る楽器を揺らすのを合図に、澄んだ音色が響いた。

ここまでの演奏を聴いていると、フルートというのは吹奏楽の中
でも音の高い楽器のようだった。そして高い音というのはふつう、
儚いとか華奢だとか、そういうか弱い印象を抱きがちだ。

ところが、今この空間を染める音は違った。

繊細な音色の中にも厚みがあるというか、確かな生命力に満ち溢

れている。

高らかに歌う旋律はのびのびとしていて、淀みのないせせらぎを生み出した。

時にはピアノの伴奏に溶け込みながら、穂ノ瀬の音は舞台を踊る。彼女自身もメロディーに身を任せるように、緩やかに体を揺らして音を奏でた。

たった一本のフルートがこの空間の全てを惹きつけ、それを清らかな流れへと乗せる。柔らかな風に包まれたような、心地よい気分だった。

自己紹介のときに、顔を真っ赤にしながら誤解を解いていたクラスメート。

小動物のようにおどおどしながら自分に話しかけてきた同い年の女子が、ここにいる何十人　いや、もっと多いかもしれない数の人々の注目を浴びている。そして、魅了している。それも、たった一人で。しかも彼女はそれに臆せず、彼らに向かって楽しげに応えている。

今この場所この瞬間は間違いなく、彼女が主人公だった。

きらきらと輝くステージが世界の中心になったような錯覚。そこに立ち、舞うようにフルートを吹く穂ノ瀬。

耳に届く曲そのものは優美な響きなのに、体の奥はこれでもかと言っぐらいにがっちりと掴まれた気分だった。

割れんばかりの拍手でふと我に返る。

音楽室をぐるりと見渡せば、そこにいる全員が舞台に向かって手を叩いていた。

前方に目を向けると、銀色に光る楽器を持った少女が深々と頭を下げているところだった。しばらくして持ち上げられた顔は、満面の笑みを湛えながら真っ赤に染まっている。

どうして今になって照れるんだよ。

ものすごく格好良かったじゃないか。

心の中でそう呟いてから、全力で拍手を送った。

音楽室を出たところで、演奏者たちに出迎えられた。

観客だった人々は、廊下の両サイドをびっしりと固めた彼らの真ん中を通り抜けてゆく。

その間に浴びせられるのは「ありがとうございました！」のシャワーだ。みんながみんな輝いた笑顔で言うものだから、思わず途中で苦笑してしまった。

脇に連なる笑顔も終わり頃になって、見覚えのある顔を見つける。……正確には頭だった。他の人よりも頭ひとつ背の低い彼女は、人垣の間から頭のとっぺんだけを覗かせている。観客たちを一目見ようとしているらしく、時折ぴよこぴよこと上下に動いた。

その前を通り過ぎようとしたあたりでちょうど、ぴよこぴよこがひととき大きく跳ねる。すると、ようやく顔の見える穂ノ瀬とバツチリ目が合った。

滞空時間はわずかだったというのに、俺を見つけた瞬間ますます笑顔になるものだから、こちらも無意識に足を止めてしまう。間もなくして、出演者の隙間から穂ノ瀬がにきつと出てきた。

フルートを手に持ったままの彼女はとことこと駆け寄ってくるなり、

「あつ、ありがとうございますっ！」

立ち止まってぺこりとお辞儀してみせる。しかし、ここはまだ観客の通り道だ。

「とりあえず他の人の邪魔になるから、ほら」

穂ノ瀬の肩を押し、人の流れがない場所まで促す。すぐそこにあった角を曲がったところで、再び彼女と向き合った。

「あの、本当にありがとうございます」

そう言って穂ノ瀬は再び頭を下げてくる。かつての俺が演奏の時にやると思っていた、見ていて微笑ましくなるような仕草のお辞儀だ。あの雰囲気を発するのは、フルートを吹く時だけなのだろうか？

「いやいや、こっちも楽しませてもらったから。俺こそありがとう」
ようやく顔を上げる穂ノ瀬に向かって、こちらも軽く会釈した。

…… 本当ですか？

とても訊きたそうな目をするので、肯定の意味を含めてはつきりと頷いてやる。すると彼女はにっこりと顔を綻ばせた。

その表情を見ているとこちらまで照れくさくなってくる。窓の外に目をやりながら言葉を続けた。

「本当に格好良かったよ。特技っていうか、夢中になれるものがあるってのは凄いことなんだな。それに比べて俺は」

言いかけて止める。何を言おうとしているんだ、馬鹿じゃないか？
自分が文化祭で暇を持て余してしようと、穂ノ瀬には関係ない。

愚痴ったところで解決するものでもないし、彼女を困らせるだけだ。
「ごめん、何でもない」

いつそ聞き流して別の話題でも振ってくれば良かったのだが、
穂ノ瀬がそんな風に人の喋ったことを簡単に突き放せる人だとは思えない。見るからに人が良すぎるタイプだ。

案の定そこで会話は途切れ、沈黙の中を気まずい空気が流れる。
どうしたものかと顔を上げられずにいると、穂ノ瀬が俺の顔を覗き込んできた。

身長差から、覗き込むというよりは彼女がこちらを見上げる形になる。

穂ノ瀬は微笑みを浮かべたままだった。そのまま俺を見つめ、ゆっくりと口を開く。

「わたし、知ってますよ。 都築くんの夢中になれること」

一年前の話です、と前置きをして穂ノ瀬は語りはじめた。

*

二年生の穂ノ瀬菜乃は、本館三階のとあるドアの前に立っていた。
ホームルームの教室とは雰囲気の違いその入り口の横には、“文

化祭実行委員会本部”と筆で書かれた長い木の板が立てかけられている。穂ノ瀬はその中に用事があった。

今年の文化祭で、彼女は単独のミニライブを開こうとしていた。正確に言うと、他の吹奏楽団員から背中を押されて、いつの間にかそういう話になっていたのだ。

しかし、一度決まってしまったからには穂ノ瀬自身も責任を感じて、率先して動こうとする。そしていつの間にか自らが中心となって具体的に計画を練り始めた。

ところがその頃にはもう、サークル参加応募の締め切りを過ぎてしまっていた。

ライブは講堂で行うつもりだったのだが、講堂は他の団体も使うから実行委員会に申請しなければならぬ。つまり、サークルとして参加応募をする必要がある。でも、応募の期限は十日ほど前までだった。

吹奏楽団本来の活動場所である音楽室でやるなら実行委員会への申請も要らないが、団全体の演奏会だつてそこで開かれる。セッティングなどの手間を考えると、音楽室でミニライブの時間を取るのにはスケジュール的に無理だった。やるなら場所は講堂しかない。

それで穂ノ瀬は代表者兼演奏者として、「応募締め切りは過ぎてしまっているがどうにかならないか」という掛け合いをしに来たのだ。

目の前のドアを時々実行委員が出入りするのだが、その度に穂ノ瀬は叱られる子供のように身を縮こまらせている。その足が前に進む気配は一向にない。

「先輩、早く入りましょーうよ」

斜め後ろに立っていた園宮が、穂ノ瀬の背中に声をかけた。付き添いで来た彼女は吹奏楽団の一年生だった。また、穂ノ瀬の単独ライブを提案した一人でもある。

「でも、今になってこんなお願いするのは向こうにも迷惑だと思うし、やっぱり」

「ダメですっ」

言葉の途中で園宮が断言する。

はうつ、と驚きの声を上げた穂ノ瀬は少し飛びのいた。

「どうしてすぐ諦めようとするんですか？　せつかく新しい曲まで用意したのに」

はたから見た感じの光景は、先輩と後輩が逆転したような有様だった。

「先輩はいつつも謙遜してますけど、団でもダントツで上手なんですよ？　それなのにこういう場面ですぐに一步退いちゃうのはもったいないです！」

穂ノ瀬は、はきはきと自分の考えを口に出せる園宮が羨ましかった。

話を持ちかけられた時は仕方なし半分だったけれど、今では自分だつて、できることなら講堂で演奏したい。

しかし、応募期限　自分が堂々とそれを宣言できる機会は、既に過ぎ去っているのだ。無理を言っても実行委員を困らせるだけだろうし、もし時間を空けてくれたとしても余計な手間を掛けさせてしまう。

「先輩が行かないなら私だけでも交渉してきます」

「ま、待つて」

一歩進んでドアに手を伸ばそうとした園宮を慌てて制した。

「わかった、わたしが行くから。少しだけ待つて」

園宮は納得いかない顔のままゆっくりと手を下ろす。いつもは先輩に対して明るく接する彼女だが、こういう時には苛立ちを隠そうとしない。

二回三回と深呼吸をしてから、穂ノ瀬は扉を軽くノックした。ドアノブに手をかけると、園宮の動きよりもだいぶおどおどした様子でゆっくりと開ける。

実行委員はそんな風に恐る恐る入ったりしないので、穂ノ瀬たちは必要以上に注目を浴びていた。またしても縮こまる先輩を見て、

園宮は小さく溜息をつく。

中は二人が思っていたよりもこざっぱりとしていた。真ん中には三つの長机が好き勝手な方向に置かれており、その上にはカップ麺の容器やお菓子の袋。同じような長机は部屋の隅にも並んでいて、そこにはデスクトップ型のパソコンが二台置いてあった。中にいた実行委員は十人弱。仕事と思われる作業をしている人もいれば、並べた椅子の上で昼寝をしている人までいる。

「どうしました？」

最初に口を開いたのは、すぐそのテーブルでノートパソコンを開いていた女子生徒だった。制服を見れば彼女は一年生で、椅子の座る面に乗っかってしまうほど長くて艶のある髪がすぐ目につく。わたしは少し癖があるから、ああいう髪型をできる人は羨ましい。そう思いながら穂ノ瀬は話を切り出そうとした。

「えっと、吹奏楽団の穂ノ瀬です。それで……」

何から話せばいいか分からずにうろたえるのを見かねて、結局は園宮が事情を説明してしまった。話のあいだ、穂ノ瀬は一步下がって目のやりどころに困ってしまう。

園宮は最初に声をかけてくれた一年に話していたのだが、そのうちに他の実行委員たちも集まって話を聞いていた。そして穂ノ瀬はますます居辛そうに、視線を床に落とす。

「なるほどねえ……」

事情を聞き終えた女子生徒は椅子の背もたれに寄りかかり、難しい表情で頭を捻る。

「まあ私に決定権はないから委員長に訊くしかないんだけどさ」

そう呟いて腕を組むと、彼女は振り返って声を投げた。

「都築先輩！ どうしますー？」

「うん？」

四つ並べた椅子の上で寝ていた男子がむっくりと起き上がるのが、立ち並ぶ実行委員たちの隙間から見えた。

都築と呼ばれたその生徒に、穂ノ瀬は見覚えがあった。一緒のク

ラスになったことはないが、同じ学年の人だ。

「話聞いてなかったんですか？」

女子生徒が眉をひそめて言うつと、

「見ての通り、今起きたところ」

都築は何の悪びれもなくそう返す。

実行委員の女子はわざと聞こえるように溜息をついてから、園宮の言ったことを手短に説明した。起きた直後は面倒臭そうな表情を浮かべてやさぐれ気味だった彼も、話が始まると真面目な顔で黙って聞いていた。

「どうしますか？」

改めて訊ねた女子に、都築は少しだけ目つきを険しくする。

「どうするつてのは、そいつらに場所空けるかどうかを言ってるのか？」

「そうですね……」

すると彼は、穂ノ瀬たちにまで聞こえるほど大きな溜息をついた。
「あのなあ。そんなの、入れてやるに決まってるだろうが」

どうするかを考えるなら、どうやって時間を空けるかって方の“どうするか”を考えろよ。

都築はそんな事を呟きながら、近くのテーブルに置いてあったプリントの束をひったくるように掴んだ。

「講堂でいいんだよな？ 一日目の午前中を演劇部が取ってるんだけど、これは本番じゃなくてリハーサルのためだ。その時間に発表したい奴がいるつて言えば、多分あいつなら喜んで譲ってくれるはず。近くの会議室が空いてるから、演劇部にはそこを当てればいいだろ」

紙をぺらぺらと捲りながら、都築は二人に向かって歩いてくる。

「演奏者は、そっち？」

穂ノ瀬のほうを見て訊くので、彼女は首を縦に振った。

「この時間だ」

持っていたプリントを穂ノ瀬に差し出し、その上を指で示す。そ

ここには二日分の講堂のタイムスケジュールが書かれていた。

「一日目のこの時間っていったら客の入りはあんまり期待できないけど、確保できる時間はもうここしかないんだ。それでいいなら今から掛け合ってくるけど？」

あまりにも急に話が進んだので、穂ノ瀬はすっかり呆気にとられてしまった。それでも何とか一言だけ口に出す。

「……………お願いします」

「了解」

都築はにつこりと笑って応えた。

*

「言われてみればあつたような気も……………」

と呟いてみるが、実際のところまったく記憶になかった。どちらかというと、当日のあわただしさや終わった後の虚脱感なんかの方が記憶に残っている。

「その時に思ったんです。都築くんって人はこのイベントが本当に好きなんだろうな、って」

穂ノ瀬は視線を横に逸らしながら言葉を漏らしていた。

かと思えば、がばつと顔を上げてまっすぐにこちらを見る。

「わたしがフルートを吹くとみんなは才能だって言って褒めてくれますけど、それだったら、あの時の都築くんみたいに『入れてやるに決まってる』って言葉を当然の事みたいに言えるほうが才能だと思うんです。わたしはその才能に助けられたんです。だから、お礼を言わなきゃいけません」

「それは……………どうも」

次はこっちが照れ臭さに視線を逸らす番だった。何ともしなしに、チラシの貼られた壁へと目をやる。

一拍の間を置いてから、穂ノ瀬の小さい声がぼつりと聞こえた。

「今日吹いた曲は、一年前に講堂で吹いた曲だったんです」

普段より賑やかな喧騒の中に、すっと消えてしまいそうなくらいの音量。

「だから、楽しんでもらえて本当によかったです」

それでもきちんとして、ここまで届いた。

前を向く。気のせいだろうか、彼女の頬は微かに赤く染まっている気がした。つられるようにして自分の耳も熱を帯びる。

「と、ところでさ、吹奏楽ってこの後も演奏あったよな、ミニステージとかで」

あまりにも柔らかな空気に心がきゅっと締められそうで、気付いた時には自ら話題を逸らしにかかっていた。

「……？ はい、ありますけど……」

答える穂ノ瀬のきよとん顔に、ますます申し訳なさを感じてしまう。

しかし、一度転じてしまった逃げの方向からは復帰することができなかった。

「そっか。じゃあ、そっちも楽しみにしてるからな」

「は、はい……」

せっかくお礼を言ってくれた女の子に、我ながら本当に失礼だった。

それじゃあと片手を挙げ、爪先の向きを変えようとしたところで、眩くような穂ノ瀬の一言。

「……でも、そっちにはわたし、出ないです」

ぴたりと自分の足が止まる。

既に反転しかけた体を再び彼女に向き直らせて、

「マジ？」

と訊ねれば、

「まじです」

苦笑いと共に頷く。その顔はやはり上気しているように見えた。

「今の演奏会には、ヘルプとして出ただけなんで、もう出番はない

んです」

「ああ、そういえばさっきもそんな事言ってたっけ」

あははは、とお互いに力の抜けた笑顔を浮かべたと思いきや、

「で、ですからそのっ！」

いきなり早口でまくし立てるので、思わず一歩後ずさりしてしまった。

「あ、ご、ごめんなさい急に」

我に返るなり慌てた様子でぺこぺこと頭を下げる彼女に、いや大丈夫だからと笑ってみせる。

やがて、安心したような表情を見せた穂ノ瀬は恥ずかしそうに目を伏せた。

それでも段々と顔を上げて、俺と正面から見つめあう形になる。そして、ゆっくりとこう言った。

「なので……良かったら、一緒に回りませんか？」

それなのに数秒後には、

「でももう三年生ですし、忙しいでしょうから、ホントに良かったらでいいんですけどっ！」

両手を顔の前で振りながらわたたと喋りだすところは、やはり穂ノ瀬だった。

誘いにはもちろん、快く乗った。

「すぐに支度してきますから待ってて下さいっ！」

ぴゅーっという効果音がつきそうな勢いで駆けていく穂ノ瀬を見ると、俺は廊下に一人取り残される。

傍から見た様子は同じでも、一時間前とは打って変わった心境だった。

チラシの貼られた壁に背を預け、窓の向こうの中庭に目をやる。そこは人に溢れ、誰もが楽しそうだった。

文化祭は、まだまだこれからだ。

<第2演目：吹奏楽部

「君に捧げる歌」

f i n
>

第3演目：軽音楽部 「水中花」

？

屋上に、二つの人影を見た。

ミニステージで行われている後夜祭をどこで見ようかと、中庭を歩いている時だった。

本館のピロティから一陣の風が流れ込んでくる。それに誘われるようにして見上げると、校舎の上に立つ姿があったのだ。

地上から見たときの屋上というのは、そのほとんどが死角になる。校舎の壁に隠れ、かろうじて胸元あたりまで姿を見せているのは、今年の文化祭の実行委員長だった。

この距離だと顔で区別するのは難しいが、一人だけ色違いのハッピは朝の開会式のときにも見た覚えがある。何より印象的なのが、驚くほどに長い黒髪だ。屋上の風にはためき横になびいているが、彼女自身はそれにも留めずただただ腕を組んで立っている。

その実行委員長の斜め前 こちらから見て手前にも、うちの制服を着た女子生徒の姿があった。

委員長は中庭にいる人々の視線を避けるように一歩退いているが、こちらはそうではない。目の前のフェンスに手をつき、じっと中庭を見下ろしていた。遠目からでも分かる特徴というものが彼女にはないけれど、その雰囲気にはどことなく心覚えがある。

見えていて奇妙なのは、その二人の距離感だ。

全くの他人同士だというには、立っている場所がやけに近い。

しかし、互いに知り合いだと想像するにも違和感がある。どちらも相手に視線を向けようとしないうし、それぞれが思い思いの意思で

そこに立っている様子なのだ。

不思議に思ったままその光景を見てみると、ハッピを着た委員長はさらに後ろへ下がって死角へと消える。

普段から立ち入り禁止のはずの屋上に、どうして人がいるのか。

そして、フェンス際に立っていた少女。あの姿にはやはり見覚えがある。しかし僕は、その可能性を鵜呑みで肯定することができなかった。

いなくなった実行委員長を追うように、僕は駆け出す。

校舎に入り、二人の立っていた場所に一番近い階段を選んだ。校舎内の展示が終わろうとしている中、上の階へ向かっているのは僕ぐらいだった。下りてゆく一般客の視線をよそに、僕は一段飛ばしで階段を上る。

実行委員長と出くわしたのは、僕がちょうど二階の踊り場を回ってきたところだった。

腰ほどはあるうかという長い髪。階段を一步下りるたびにふわりと広がるから、ゆっくりと羽ばたいているようにも見える。

そして、色違いのハッピと役職名の記された腕章。間違いなく、さつき屋上に見た姿だ。

昼間の喧騒が遠のきつつある校舎の階段を、彼女は鼻歌を歌いながら下りてきた。人差し指を立てて銀色の物体をくるくると回していたが、僕が正面に立つと鼻歌もくるくるも止めてしまう。

委員長は階段を下りる足も止め、僕の視線を追った。その先が自分の手の中だと知ると、彼女はくるくるさせていた物体を僕に向かって振ってみせる。

それは鍵だった。キーホルダー代わりに付けられているネームタグには、手書きの文字で“本館西 屋上”とある。

そこで思い出す。去年の文化祭で知ったことなのだが、文化祭期間中は校内の鍵を全て実行委員が管理しているのだ。

実行委員の長である彼女はわざとらしく肩をすくめ、鍵をポケットにしまう。

「開けたよ。後夜祭のステージを見るには困らない場所だろうね」
再び歩き出した彼女は、すれ違いざまにそう呟いた。

色違いのハッピが一階へ降りていくのをその場で見届けてから、
僕は再び階段を駆け上がった。

もうひとつの疑問、ありえないはずの可能性を確かめるために。

鉄製のドアは、錆び付いた音を響かせながらも確かに開いた。

初めて足を踏み入れる屋上。足元はコンクリートの板が敷き詰められていて、建ってからそのままなのか、その表面はぼろぼろだった。中には薄く苔がむしてるところもあって、ほとんど人が立ち入っていない事を物語っている。

上を見れば、中庭で見たよりもずっと大きな空が広がっていた。

街の建物は地平線の端をギザギザと刻んでいるだけで、夕焼けを飲み込んでしまうほどの大きさではない。茜色の光を横から照らされた雲は奥行きが際立ち、神々しいとまで感じる事ができた。

僕の立つ斜め後ろからは実行委員の声が聞こえてくる。マイクで拡声されているのだけれど、かえって声がこもってしまい、はつきりとは聞き取れない。

気持ちだけ涼しくなりだした風を受けながら、階段室をぐるりと回りこむ。僕は中庭を見渡せる方。あの姿のあった場所へと向かった。ここに来るまでは全速力で駆けていたのに、ドアを開けてからの僕はなぜかゆつたりとした気持ちで歩いていた。

ところが、中庭に面したフェンスを視野に入れたと同時に僕の足は止まる。

こちらに背を向け、フェンスの傍に佇む女子。身にまとう制服はここ、矢端高校のものだ。頭の後ろでくくったポニーテールが、さらさらと風に揺られている。

中庭から見たときと何ら変わらない姿。それが今、すぐそこに立っていた。

もしかして、が確信へと変わる。

僕は彼女の名前を知っている。

けれどその姿を見て、僕はまず自分の目を疑った。目を瞬かせてみるが、彼女の輪郭は薄れも消えもしなかった。

幸い他には誰の姿もない。声を掛けてみればいい話だ。

恐る恐る一步を踏み出しながら、口を開く。

「……能登？」

夕日で切り取られた僕の影が、彼女の足元に差し掛かる。

気付いて振り返ったその顔は、まだ記憶に新しかった。

「あ、西野くん」

相手はさして驚きもせず、嬉しそうに顔を綻ばせた。

ところが僕は、そんな風に笑顔を作ることができない。だって。

「どうして、お前がここに？」

能登有紀子は、一月前に死んでいる。

しかし、目の前にいるのは確かに彼女だ。僕の呼びかけに振り返ったし、向こうも僕を知っていた。なにより声や髪型や仕草、全てがそのままだ。

「どうしても何も、F S Iの演奏を聴きに来たんだよ？」

そこに何の疑問もないでしょ？ といった具合に首を傾げてから、

「というわけで、化けて出ちゃいました」

能登はいたずらっぽい表情で、舌をぺろつと見せた。

そこで、中庭で覚えた違和感を思い出す。

話し掛けるでもないのに、彼女のすぐ傍に立っていた委員長。き

つとあの人には、能登の姿が見えなかったんだ。

どう返せばいいのか分からずに固まっていると、能登は唇を尖らせて言った。

「もっとビックリしてくれると思ったんだけどな」

「……いや、十分驚いてる」

なんとかそれだけ口に出すが、彼女は不満そうにしたままだ。

「せめて腰のひとつやふたつ、抜かしてくれないとなー」

「ひとつしかないんだけど」

「あれっ、そうだったんだ？」

僕の突っ込みに、能登はわざとらしい笑みを浮かべる。かつてのいつも通りが戻ってきたみたいで、嬉しいような寂しいような気分になった。

屋上の端まで歩み寄り、能登の隣に立つ。フェンス越しの向こうを見下ろせば、そこはさっきまで僕のいた中庭だった。出店の食べ物匂いや人々の声が、僕の頭上へと抜けてゆく。

四方を校舎に囲まれたその空間は正方形の形をしていて、前方にはミニステージが設置されている。今は秋だというのに、その後ろには大きく桜の樹が描かれていた。塗りの粗さが目立つ背景だったけれど、日が傾いてライトアップされると結構綺麗に見えるものだった。

このステージは文化祭のために設置されたものだから、この後夜祭を終えて翌朝になってしまえば、解体されて跡形もなくなる。今はこれだけ人を集めている舞台が、何事もなかったように散ってしまっ

……ああ、だから背景が桜なのか。あの花が咲き誇るのだって、一年に一度のわずかな期間だけだ。

「西野くんも聴きに来たんでしょ？ F S I」

能登の問いかけに、僕は頷いてみせる。

後夜祭は後半に差し掛かり、これからはバンド演奏が立て続けに行われる予定だ。

僕自身は、楽器や音楽というものにあまり馴染みがない。というか、学校の授業以外で触れた機会は無に等しい。

けれど、こういう機会に生の演奏を聴くのは好きだった。たぶん、生演奏だから嫌いという人はいないだろう。

僕と同じ年の人たちが、僕にできないことを目の前で成し遂げる。その姿は格好いいし、羨ましくもある。

ステージの上では、同じ柄のハッピを着た実行委員たちが忙しうにしていた。そして、それに期待を掛けるかのように中庭へ人が集まる。校舎内の展示サークルが終了時刻を迎えたのだろう。

「なんてったって、カノジヨの晴れ舞台だもんね」

「……うるさいな」

ぶっきらぼうに返したのだが、能登はにこにこ笑顔のままである。

さつきは「見に来るな」と言っていたが、もちろん僕は見る気満々でいた。

能登の言う“カノジヨ”とは、水越さつきのことだ。僕らは付き合おうとはつきり決めたわけでもないし、お互い告白さえしていない。今までに二回だけ二人きりで遊びに行ったことがあるぐらいであとは下校のタイミングが被ったら並んで一緒に帰る程度だ。

傍から見れば確かに付き合っているような状況なのだろうし、それは自覚している。けれど、僕たちはそれよりも少しだけ手前にいる段階なんじゃないだろうか。それがもどかしいようで、くすぐったくもある。

「FSIって何番目に演るのかな？」

能登がそう訊ねるので、僕はポケットからパンフレットを取り出して広げた。

「四組あるうちの三番目だね」

そう伝えると、能登は少し驚いた顔をしてから「なかなかやるじゃない」と呟いた。

「演奏の順番を決めるオーディションは三日前だったはずだよ？」

それなのに、やっぱりすごいね、FSIは。持ち直せちゃうんだ」

明るく言おうとしているのだが、その目は地面に落とされてしまった。

FSIというのは、さつきたちのバンドの名前だ。これは略称だったはずなのだけれど、

「……略さずにいうと何だっけ」

「ファイブシツピンバート」

能登は中庭に目を落としたまま答える。

「意味は？」

「自分で調べてよ」

さらに訊くと、能登はムツとした顔で僕を見た。前にも何度か同じ質問をしたことがあるからだ。

「すぐ他人に頼らないで自分で解決しようとした方が、記憶に定着するって言うよ？」

「別に教えてくれたっていいじゃんか……」

聞こえるように呟いたのだが、能登は「ほら、始まる」と言っ取り合ってくれなかった。

一拍の間を置いて、ギターの音が耳に届いた。続いてボーカルも重ねられる。大きなスピーカーから放たれる大音量は、中庭のキャパシティーを越えて校内を満たした。

会話もままならないボリュームだったので、僕らは会話を止めて黙って演奏を聴いていた。僕は何度か能登のほうを向いたのだけれど、彼女の視線はずっとステージへ送られたままだった。

一組目の演奏が終わると、ステージに立つ人はすぐに入れ替わった。今度はバンドではなく二人組。それもエレキではなくクラシックギターだ。

「さつきは、元気にしてる？」

横を見れば、能登が僕をまっすぐに見上げている。

「まあ、最近はなんとかなってるよ」

大丈夫とは言えなかった。あれから一ヶ月が経って、さつきはそれなりに元気を取り戻した。けれど、どこかに暗い部分を抱えたままにいるのも事実だった。

失ってしまったものは決して戻ってこないから、欠けた部分はそのままで過ごして行くことになる。だから、全てが今までどおりに戻ることはきつと有り得ない。

能登もそれを理解したのだろう。一度だけ地面に目を伏せてから、

「そっか」

と再び僕を見て、少し寂しそうに微笑んだ。

二組目が演奏している時も、僕らの間には会話が無かった。

一組目のそれとは違って物静かな曲調だったから、きつと声を出せば相手に届いた。けれど、今の能登と話すべきことが、僕には分からなかった。

その演奏もやがては終わる。演奏者がステージを降りれば、入れ替わるようにして実行委員がセッティングに入った。

次がF S I さつきたちの出番だ。

セッティングと言っても、手間のかかる準備はあらかじめ済ませているのだらう。マイクやスピーカーの位置を変えるだけで、そんなに時間の掛かるものではない。

ところが能登は、その短い間でも気付いた。

「あ」

彼女の声を聞いてから、僕もそれに気付く。舞台の前方、客席から見て手前の位置に、マイクスタンドが三つ置かれていたのだ。

舞台の調整をしていた実行委員たちは、何事も無かったようにステージを後にする。少しの間を置いて姿を現したのは、さつき達F S Iの面々だった。

一人はキーボード、一人はドラム、一人は向かって左側のマイクスタンドで立ち止まる。しかし、三人の視線は中央のマイクスタンドへと釘付けになっていた。

最後にステージへ上がったのはさつきだ。袖から中央へと進んだところで、ふいに足を止める。

これ以上舞台袖から誰かが出てくる様子はない。マイクが一つ余っているのだ。

実行委員もそのことに気付いたらしく、残りのマイクスタンドを慌てた様子で持っていこうとする。

ところが、さつきは実行委員に歩み寄ると手を突き出してそれを制した。ハッピを着た生徒は戸惑った様子でさつきを見るが、彼女

は首を小さく横に振るばかり。

やがて、実行委員は手に何も持たないまま舞台袖へと消えた。さつきはそのまま、向かって右側のマイクの前に立つ。

中央には、誰もいないまま。

「そんな……」

震える声に目を向けると、能登は表情を歪めながらステージを見つめていた。

司会を挟まず、いきなりドラムスティックでカウントが取られる。そして、舞台の上から音が溢れ出した。

それまでの二組と違って、F S Iの曲はオリジナルだった。

ギターソロから始まったメロディーは、スネアの刻むリズムを踏みしめながら踊りだす。キーボードが対旋律を奏できれば、ベースが彼らの音へ溶け込みながら上へ上へと押し上げる。

ドラムが二回大きく打ち出せば、さつきの声が上に乗せられた。そして一つの流れになる。

やがて迎えた盛り上がりで、バンドは地を蹴って飛び立った。そんな感じがしたのだ。両手いっぱい風に掴み、曇りのない青空へと舞い上がるような気分だ。

メロディーはさらなる高みへ突き進む。さつきの声が一旦止んでも、ギターとキーボードの間では軽快なやり取りが行われた。

様々な雑音の入り混じっていた中庭が、彼女たちの音によって純粹に染め上げられる。そこにいる人々の目も、鼓動を刻む渦の中心へ自然と向けられていった。

ついに曲は終わりを向かえ、全員の音が止む。それでも、熱気を忘れることのできない空気は未だに震え続けているかのようだった。演奏に負けんばかりの拍手が響く。しかし四人はステージの上から動こうとせずに、それが鳴り止むのを待っていた。

さつきがマイクに顔を近づけて、言う。

「ステージ部の方、すいません。もう一曲だけお願いします。聴いてください、『水中花』」

実行委員の反応を待たずにイントロが紡がれる。キーボードからピアノのメロディが流れ出した。夢中で、それでいて深部には強い意思を秘めたような旋律。

リズムはとても穏やかだ。控えめに刻んだパーカッションを追うように、さつきの歌が重なる。

それとほぼ同時。眼前にあつた緑色の金網が、ぎしりと音を立てて揺れた。

隣を見てみれば、手が真っ白になるぐらいにフェンスを握る能登の姿があつた。

自分でも気付いていないのか、頬を伝う光を拭おうともしない。ただただステージに立つ彼女たちを見つめ、きゅっと結んだ唇を震えさせていた。

その横顔は嬉しそうで、悲しそうで、優しい。

好きな人がいる。

でもその人は私の友達の恋人。

だからこの想いは決して他の人に知られてはいけない。

水中花のように、ずっとずっと水の底に沈めておかなくてはならない。

そんな歌だつた。

ゆつたりとした曲に乗せられたまっすぐな歌詞は、僕らの立つ屋上までも包み込んだ。

さつきたちが演奏を終えて舞台を去つた頃には、隣にいたはずの能登の姿は消えていた。

フェンスは乗り越えられる高さではないし、屋上のドアは開閉する時に軋んだ大きな音を立てるが、それを聞いた覚えもない。

その代わり、「ありがとう」という彼女の声を聞いた気がした。

？

『Take Off』は軽快なリズムの、いかにも彼女らしい曲だった。

奇跡ともいふべき偶然が私たちに降りかかったのは、今よりも一年と少し前のことだ。

入学してクラスが振り分けられた翌日、初っ端に待ち受けていたのはクラスメートの前での自己紹介だった。中学でも学年を重ねるたびに行われたことだが、高校でもそれは一緒らしい。

五十音順に席を立てて自分の名前や趣味を挙げていくのだが、似通った音楽の趣味を持つ女子が私を含めて五人もいることがわかった。

直後の休み時間になれば、自然とその五人が集まりだす。そして話してみれば、なんとも恵まれた面子であることがわかった。

ギターが二人にベース、キーボード、そしてドラム。あまりにも都合よく揃ってしまったので、五人は思わず顔を見合わせてしまった。

そんな中で、誰もが思っていたことを最初に口に出したのが能登有紀子だった。私たち五人は、その後も彼女を中心に動いていた。今でも覚えている。キラキラした表情で私たちの顔を見ながらこう言ったのだ。

ねえ、バンド組もうよ？

もちろん全員が笑顔で頷いた。

その翌日には、有紀子はバンド名を決めてきた。

朝、私が教室に顔を出すなり、有紀子は私のところへ駆け寄ってきた。

「ねえさつき！ バンド名はこれでどうかな？」

高校生活が始まって一週間も経っていない時期だったから、クラスには友人関係やグループというのがほとんど出来上がっていない。そんな中で明るい声を上げるものだから、彼女はクラス中の視線を浴びていた。

そんなことにも気付かない様子で、有紀子是一片の紙を見せてくる。

“Five Ship Invert”と、そう書いてあった。

「ファイブシップ……インバート？」

私が読み上げると、嬉しそうに頷いて繰り返す。

「そ。ファイブ・シップ・インバート。略してFSIだね」

何とも語呂の悪い略称だ。私はまずそう思ったのだが、彼女はお構い無しに由来を語りだした。

「十年以上も前なんだけどね、お父さんと一緒にアクロバット飛行を見に行ったの。飛行機の後ろからこう、もわもわーと煙が出てね、ハートの形を描いたりするんだよ！ 本当にすごい！」

私たちが立っていたのは教室の入り口だったので、邪魔にならないよう横に避けてから話しの続きを聞く。

「それでさ、シヨ一の山場のあたりで、急に地味な技を始めるんだよね。四つの飛行機がこう、ひし形にくっついて背面飛行するの。それが、フォー・シップ・インバートって言うんだって」

言いながら両手の親指と人差し指でひし形を作り、すーっと宙を移動させる。

四機編隊が背面飛行する技を、フォーシップインバートと呼ぶらしい。

「でもね、その技って見た目がすごい地味なんだよね。小さい頃の私にはそう見えただ。だからお父さんに訊いたの。あの地味で格好悪い技はなに？ って。そうしたらお父さんは『地味に見えるかもしれないけど、たくさん練習して全員の息をぴったり合わせなきゃいけない、すごい技なんだ』って教えてくれたんだ」

有紀子が話している間にも、教室には続々とクラスメートが入ってきた。その全員が、一旦彼女に視線を送ってから通り過ぎていく。「なんか、そういうのってカッコいいと思わない？　ちゃんと練習してて、息を合わせて、見た目がちょっと地味でもちゃんと『すごい』って思わせることができるようなバンド」

確かに、と私は頷く。

「それで私たちが五人だから」

「FourじゃなくてFiveってこと」

言葉を引き継ぎ、有紀子は嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「ねえ、どうかな？　いいでしょ？」

眩しいほどに目を輝かせる彼女に、私は微笑みを返した。

「うん、いいと思うよ」

他の三人も案を持っていた訳では無かったので、バンド名はそれに決まった。

それから私たちは一学期と夏休みにかけて、練習を重ねた。たいていは軽音部の部室を使ったが、そこが埋まっている時はたまにスタジオを借りたこともある。

そして初舞台は、結成から半年も経たないうちに迎えた文化祭だった。

五人共通の音楽の趣味というのが八十年代後半から九十年代にかけてのガールズバンドだったので、その辺りで一般の人たちも知っていたような曲をピックアップして演奏した。結果、それなりに好評ではあったのだけれど、私たちはそれで満足しなかった。

バンドを組んだからには、オリジナルの曲を作りたいと思うのが当然の流れだ。次の文化祭では、一から自分たちで組み上げた音楽を演りたい。学年が上がってから、そうやって曲作りが始まった。

F S Iの五人は楽器はやっていても、作詞や作曲をしたことのある人というのがいなかった。手探りでああでもないこうでもないと言っているうちに二週間ほどが経つ。

そんな状態を打開したのは、やはり有紀子だった。

「ねえさつき！ 曲できた！」

私が登校して教室に足を踏み入れると、彼女は屈託のない笑みで私に飛びついてきた。

前にも見覚えのある光景だと思いながら有紀子の体を引き離し、話を聞いてみる。

「バンド名がアクロバット飛行なら、タイトルはこれしか無いと思っただ」

言いながら見せてきたのは、歌詞をメモした紙だった。

タイトルは『Take Off』。太字で書かれた横文字の隣には、ご丁寧に『作詞：能登有紀子』とまで加えられている。

テイクオフ 離陸。これから空を飛ばうとする飛行機が必ず行く動き。つまり、全ての始まり。

「譜面に起こしてないけどメロディーもちゃんと考えてあるんだ。

こうね、間奏でギター同士の掛け合いが」

「わかったわかった、放課後にね？」

有紀子の肩に手を置き、くると教室の中を向かせる。このまま話を聞いていると、教室の中で堂々と歌いだしかねない。

そのまま彼女を自分の席へ着かせようと背中を押していたのだが、有紀子は突然振り返った。

「ところでさつき君、カレシとはどうなってるのかな？」

ニヤリとした表情を浮かべ、私のおなかを肘でつつく。

「……あいつのこと？ 別に彼氏じゃないんだけど」

有紀子を睨みながら言ったのだが、彼女はとぼけるように呟いた。

「放課後にデートしても、まだそんな事言っかなー」

「ちよっ……なんで知ってるの」

「さあねー？ それにしてもカラオケとは驚きだよ。持ち歌はひと

昔前のばかりなのに、大丈夫だった？」

「うるさい。最近のだって一応知ってるわよ」

「へえー、どうだか」

手で口を隠しながら、からかってくる。顔が熱くなるのを感じな

がら、私は有紀子の頭を小突いた。

私と西野はどちらからも告白していないし、付き合っているわけでもない。呼び捨てではあるけれどお互いに苗字で呼んでいるし、二人で遊びに行ったのだって有紀子の言っているカラオケが初めてだった。

他人がこんな関係でいるのを見たら、私だってそれは付き合っていると云うだろう。けれど、やっぱりまだそこまでは発展していないのだ。今どき流行らない淡い恋をしているものだ和我ながら思うが、先を急ぐ必要もないと思っているのも本当だった。

……でも、下の名前で呼び合うぐらいは、そろそろいいかもしれない。今度さりげなく提案してみよう。

「まあ、向こうもさつきのことを気に入ってるみたいだし、焦りは禁物だよ」

「わかつてるよ」

わざとぶつきらばうに答えると同時に、私は有紀子何かを手に持っているのを見つける。

「それ何？」

体を傾けて覗き込んでみれば、彼女は黄色いクリアファイルを抱えていた。

「ああ、これ？ ボツネタ集。恥ずかしいから閲覧厳禁」

笑いながら言って、それを両手で隠した。

有紀子がこの世の人でなくなったのはそれから四ヶ月後のこと。

それは新学期が始まって間もない頃で、本番の文化祭まで一ヶ月を切っていた。私たちは毎日学校に早く来て朝練を行っていた。

その練習に遅れそうで急いでいたのだろう。有紀子は赤信号を無視して道を渡り、トラックに撥ねられた。

お葬式にはF S Iのメンバー全員が出たけれど、四人は全く泣かなかった。突然「能登有紀子は死にました」なんて言われたって、

信じることができなかったからだ。

毎日朝早くから一緒にギターを弾いていた仲間が、
名案を思いつく度に私に駆け寄ってきたあの子が、
そんな簡単に目の前から消えるなんてありえない。

斎場ではほとんどの人が泣いていて、私たち四人が無表情で、写真の中の有紀子だけが笑顔だった。

その光景がなんだか不気味で、おかしく感じた。本当に不気味だから笑い飛ばしてやろうとしたのだけれど、顔が引きつるだけだった。

そして私たちは次の日から、何も変わらない生活へ引き戻された。有紀子がいなくなっても平然と流れ続ける時間に、やり場のない苛立ちを感じたこともある。

気付けば私たちは、残された四人で練習を続けていた。きっかけの一言を放った人物がそこに来ることはなくても、みんなは集まった。

有紀子はボーカルだったので、私が引き継いで歌うことになった。彼女の弾いていたリズムギターでどうしても欲しいフレーズは、私のパートに組み込まれる。私と有紀子、つまりギター同士で引き継ぐはずだった間奏は、ギターとキーボードで引き継ぐように譜面を書き直した。

そうやって、能登有紀子はどうとう私たちの中からも消えていった。

一週間が過ぎた頃。

授業中、何の気なしに有紀子の席を見た。というよりは、毎日そこだけが必ず空席になっているので自然と目が行ってしまうのだ。いつも通り視線を前に戻そうとするのだが、空っぽだと思っていた彼女の机の中に、何かを見つけた。

放課後になるのを待ち、誰もいなくなった教室で確かめてみる。

するとそれは、いつか見た黄色いファイルだった。

それを手に取った瞬間、消えかかっていた有紀子が私の中で蘇るような心地がする。この間まではすぐ近くにあった感触なのに、たった数日で随分と遠ざかっていたみたいだ。

そして気付いた時には、ファイルの中にあった一枚の紙を取り出していた。半分に折られたそれを、おもむろに広げる。

書かれていたのは、歌詞だった。彼女の言ったとおり没ネタだったらしく、上には大きくバツテンが書かれていた。

タイトルは、『水中花』。

歌詞を読んですぐに全てを悟った。

この歌に出てくる「わたし」は有紀子自身、「わたし」の想い人は西野で、友達というのが私。

あまりにも分かり易すぎる。

有紀子がどんな思いを抱えていたのか。どんな気持ちで私と西野の仲を応援していたのか。だから、こんなに大きく、何度もバツ印を書いているのだ。これを私に見せたら、それこそ水中花を空気に触れさせてしまうのと同じだと、そう思っ

て。『水中花』を手にしばらく立ち尽くしていた私は、歌詞の書かれた紙を黄色いファイルごと自分の鞆に入れた。

どうしてそんなことをしたのか。有紀子が見られないことを望んだのだから、見なかったことにすればよかったのかもしれない。

でも、私はそれを承知の上で掘り起こした。ひどい我がままだといふのは自分でも分かっている。

けれど、私たちの生活から消えかかっていた、能登有紀子という一人の女の子を忘れたくない。

そういう気持ちで私の手を動かした。

そこからの動きは早いものだった。三日後には『水中花』にメロディーを付け、急いで練習を始めた。

文化祭は目と鼻の先まで迫っている。それなりに技術のあるメンバーだから、それまでに曲を完成させることは難しくない。しかし、

全員が揃って綺麗な背面飛行を見せるにはどんな時間だったか
惜しかった。

そうやって短い期間にできる限りのことを重ね、私たちは当日を
迎えた。

自分の鼓動が身体を伝って聞こえてくる。

一組目のライブが始まった頃からずっと心を落ち着けようとして
いるのに、心臓はちつとも言つことを聞いてくれなかった。

もう一度、大きく息を吸って吐き出す。やることはやったんだ、
大丈夫。

瞼を開けば、ちょうど二組目の演奏者がステージを降りてきたと
ころだった。彼らと入れ替わるようにして、セッティング担当の実
行委員がステージへ上がる。

実行委員の指示でしばらく舞台袖で待機させられ、やがてGOサ
インが出た。どうぞと誘導してくれる係の子に、心の中で謝る。ご
めんなさい、ちょっとだけステージジャックさせてもらっね。

F S Iのメンバーは次々と立ち上がり、順に舞台の表へと向かう。
私はギターを掴んで、仲間たちの後に続いた。

まずは離陸から。

やがては一緒になって空を飛ぼう。

しっかりと息が合っていれば、どこまでだって行ける。

それが、私たち五人の音楽なんだ。

<第3演目：軽音楽部 「水中花」 f i n >

第4演目：実行委員会 「忘れたくない」

「こんな所に居たんですか」

薄暗い闇の中、ぼくの声にその横顔が振り向いた。

ぼくを認めるなり、彼女は軽く手を挙げて応える。夕方あたりからふいに見当たらなくなつて、ぼくがずっと探していた人だ。

グラウンドの入り口付近まで寄せられた朝礼台。今年の文化祭実行委員長である北条舞香先輩は、その上に座つて足をぶらぶらとさせていた。

「桐生か。よう」

にやつと笑みを浮かべてから、北条先輩は朝礼台の上を横にずれる。隣に座れということなのだろう。僕は空けられたスペースに腰を下ろし、先輩と同じように両脚を宙に投げ出した。

「いいんですか？ 委員長がここでくつろいでいて」

「大丈夫だろ」

たしなめる口調で言つたつもりなのに、先輩は何の悪びれもなく平然と言つてのけた。そして腕を組み、誰もいないグラウンドにちらつと目をよこす。

「追い出しは他のみんながやってくれるさ」

お前だつてそれが終わつたからここに来たんだろう？ とこちらを見ながら訊ねるので、ぼくは頷いた。

二日間にわたる文化祭は、実質終わりを迎えていた。サークルの展示はとくに店じまいをしているし、ミニステージで行われていた後夜祭もつい先ほど閉幕した。

しかし、出し物がなくなつたからといってすぐに人が帰っていくかといえ、そうではない。ぼくらが何も動かないでいれば、入場者は少なくとも二時間は校内にとどまり続けるだろう。

開催側としてもそれは困るので、客の居られるエリアを徐々に狭くしていき、最終的には校内から出てもらうように仕向ける。この作業には“追い出し”という、少々えげつない呼称が付いていた。

「持ち場だった本館の西半分は終わらせてきました」
すると北条先輩は自分の腕時計を確認し、ほうと感心したような反応をする。

それから何故か唇をかむと、

「……お前には一番面倒な部分を割り当てたつもりだったんだがな」と呟き、わざわざ聞こえるように舌打ちするのだった。

「やっぱりあのチーム分けはぼくを苛めるためだったんですね!？」
他の先輩たちからも言われていたのだ。『本館西をあの人数でなんて大変だな、しかもお前リーダーだろ?』とかなんとか……。

思わず声を上げたぼくを見て、北条先輩は楽しそうに笑った。切れ長の目がずっと細められる。

「苛めとは失礼な。あれはお前を信用しての割り振りだったんだぞ」
「はいはいそうですか」

むずがゆい気持ちを覚えながらも、悟られまいと嫌々っぽく言葉を吐く。先輩はそれを気にも留めない様子で、正面のグラウンドに顔を向けた。

「この時間で本館西の追い出しを済ませたということは、やはり私の期待通りの働きだったんだろうな。罵詈雑言を撒き散らしながら一般客に襲い掛かる桐生。そして逃げ惑いながらも我先にと校舎を飛び出す人々……恐ろしい後輩を持ってしまったものだ」

「普通に帰ってもらいましたよっ!」

やれやれと大げさに溜息をつく先輩に、ぼくは思わず声を上げる。
わかっているのだ。ぼくがムキになって否定するのを楽しんでいるのだということぐらい。

それでもぼくは突っ込まずにはいられないし、こんな形で先輩と一緒にいるのは楽しい。他の実行委員はまだ働いているから少し罪悪感はあるけれど、この瞬間はとても心地よいものだった。

「それとな桐生、お前は私がここでくつろいでいるのが悪いみたい
に言ったが、何のための追い出しマニュアルだ？ 当日になって私
が指揮を取る必要をなくするための物だろうに」

「……前々からこうする気だったってことですか」

「まあ、そういうことだ」

先輩は口を開けて笑う。前を向いたままの彼女に倣って、ぼくも
グラウンドに目をやった。

陽はすっかり落ちてしまっていた。まず最初に追い出しの済んで
いたグラウンド近辺は真っ暗で、他に人の姿は見当たらない。校舎
の窓から漏れる蛍光灯の明かりが、かろうじてここまで届いている
だけだった。

そんな中では人の輪郭も曖昧になってしまふ。ここにいる先輩だ
って、遠目からだとなが居るのは分かってても、普通ならそれが誰な
のかまで区別はつかない。

なのに朝礼台に座る人影が北条先輩だと分かったのは、一人だけ
色違いのハッピと長い髪のおかげだった。癖のない黒髪は今でも微
かな光を受けて、きらめいているように見えた。

緩やかに流れていた風がふとその向きを変えれば、彼女の髪もそ
れに添って揺れる。風上になった先輩の方から、ふわりと甘い香り
が漂ってきた。

それより一拍遅れて、何やら香ばしい匂いも鼻をくすぐる。

「コーヒーですか？」

後からやって来たのは、確かにその匂いだった。

「ああ、そういえばまだ一口しか飲んでいなかったな」

言いながら先輩は缶を持ち上げる。ぼくが座っているのとは反対
側の隣に置いていたらしい。口元に運び少しだけ傾けると、再びそ
こに置いた。

「どうした？」

ずっと横顔を見ていたのに気付いたようで、先輩はぼくの方を向
く。

「カフェオレなんですね」

「匂いでわかるのか。ああ、カフェオレだけど　なんだその意外そうな顔は？」

「実際に意外だったんです」

「何がだよ」

先輩の声が少し不機嫌の色を含んだ。

「その、先輩はストレートで飲みそうな雰囲気だったんで……」

文化祭の準備中に先輩が何かを飲んでいる姿は何度も目にしている。しかししたいはペットボトルで、中身もお茶かスポーツドリンクだった。だからコーヒー類を飲むところは見たことがなかったのだけれど、彼女の男勝りな性格からしてミルクや砂糖を入れるようなタイプではない気がしていたのだ。

だんだんと目が慣れてきたおかげか、目の前にある表情の細かい変化までも分かるようになってくる。先輩はちよつとだけ困ったような顔をしてから、

「私は、ブラックは飲めない」

ややトーンの下がった声でそう呟いた。言うなり眉間にしわを作る。

「だからそうやって意外そうな顔をするな」

「ごめんなさい……」

不快そうな口調と一緒に鋭い視線が向けられるので、思わず顔を逸らしてしまった。

「そ、それにしても珍しいですね。先輩がコーヒーって」

今度は気に障った様子もなく、普通に言葉が返ってくる。

「まあな。私も普段は飲まないが、今日ばかりは仮眠を取る訳にもいかないんでな」

「あ、カフェインが目的だったんですね」

ここ一週間はばくも、睡眠時間を削った作業が続いていた。委員長である北条先輩となればなおさらだろう。文化祭が終わることは寂しいけれど、これ以上続くと今度はぼくらの身体が持たない。

けれど、そんな慌しい日々もあと数時間で終わりを迎える。ブラックを飲めない先輩があえてコーヒーの入った飲み物を選んだのは、そのあたりの気合の表れなのかもしれない。

「それに、うかうかと寝ていたらいつ桐生に襲われるかわからないしな」

「しませんってばそんな事っ！」

「どうだか」

振り向いて叫ぶと、僕を横目で見ながら鼻で笑う先輩がいた。

……万が一そんなことがあり得たとしても、先輩が相手だったら返り討ちにされそうな気がする。

「何か言いたそうだな？」

「いえ何も」

もともと切れ長で目元がはっきりとしているのに、睨まれたらたじたじになるばかりだった。

「そういえば先輩」

「なんだ？」

恐怖からか、ぼくは違う話題を思い出して先輩に振る。

「追い出しのとき、本館の屋上が開いてたんですよ」

すると先輩は驚いた様子も見せずに、

「ああそれ私がやった」

さらりと言つてのけた。

「あーそうなんですか先輩が……って何やってるんですか先輩!？」
現実でノリツツコミなんて初めて見たぞ、と呟く先輩は無視して話を続ける。

「追い出しが済んだはずの場所からうちの生徒が出てきたから驚いたんですよ？ どこに居たか聞いてみれば屋上だって言うし」「
ぼくがいくら喋っても、先輩は楽しそうに顔を綻ばせるばかりだった。それを見るのは個人的には嬉しいが仕事上そんなことを言っている場合ではない。」

ひととおりの事情を説明すると、先輩は何の悪びれた様子もなく

ぼくに訊ねた。

「それで、屋上の鍵は閉めた？」

「閉めました」

「そのとき上に誰もいないか確かめたか？」

「確かめました。誰もいませんでした」

そう答えると先輩は満足そうに頷いて、

「うむ、ご苦労」

ぼくの頭を軽くぼんぼんと叩いた。その行為自体は個人的にはとても嬉しいが、

「それだけですかつ！？」

文化祭期間中は全ての鍵を実行委員が管理しているけれど、もちろんそれらを自由に使っていい訳ではないのだ。

ぼくの声に、先輩は動きを止める。そのまま数秒が経過した後、ものすごく落ち込んだ顔をしながらぼつりと言った。

「そうか……お前に迷惑をかけた分、身体をもつて償えというのか」「言つてませんからそんなこと！」

ハッピを脱ごうとするその手を慌てて止める。

「屋上開けたのが教員にバレたら大変でしたよ？」

「あいつらロクに巡回なんてしてないじゃないか」

「それでも万が一の話です！」

「まあ、マズい事だつてのは私だつて理解してるさ」

「分かつてるんなら止めてくださいよ！」

「これでも考えたんだぞ？　あまり多くの人に知られては教員にも伝わるだろうから、校内展示が終わった頃を見計らつて鍵を開けたんだ」

きつと何を言つても無駄なのだろう。この人は、やってはいけないというのを承知の上でそれを行動に移している人だ。僕もいちいち突っ込むのをやめて、正面を向き直った。

左隣から、くすつと笑い声が漏れるのが聞こえる。

「学校の屋上といつたらいろいろと定番だろう？」

先輩の声は躍っているようだった。

「今日は我々が主役だったんだ。校則で禁止なのは確かだが、そういう思い出になる場所を少しぐらい提供してやったって、バチは当たるまい」

実際使われたかどうかは知らないけどな、とその後付け加えてはまた笑う。

「なあ桐生」

いきなりむんずと頭を掴まれ、顔を横に向けさせられた。

さらさらな前髪、きりつとした目に、微笑む唇。端正な顔立ちに豪胆さを同居させた表情。

止まるんじゃないかと怖くなるぐらいに心臓が跳ねる。

先輩の顔がすぐ目の前にあった。

「楽しかったか？」

額同士がくつつきそうな距離で先輩が訊ねる。

「……はい？」

「楽しかったかって訊いてるんだ、今年の文化祭が」

どうだと言わんばかりに、先輩は口元にニツと笑みを浮かべる。

そんなの訊かれるまでもない。

準備は大変だったし、昨日今日の仕事はもっと大変だった。今だって、すぐそこに布団があればいつでも眠れるぐらいに疲れている。今日の午前中に至っては、この人に奴隷宣言までされてしまった。

それでも いや、それだからこそぼくは、

「はい、楽しかったです」

自信をもって答えることができた。

すると先輩はこれ以上ないぐらいの笑顔をつくった。いつもはどこか達観したような笑い方をする北条先輩が、子供のように相好を崩していた。

「そうか、よかった」

独り言のように呟いて、ぼくの頭を解放する。

先輩は元の姿勢に戻ると、何事もなかったかのようにグラウンドを

ぼんやりと眺めた。仕方なくぼくも同じような体勢になる。

その後待っていたのは沈黙。一分にも十分にも感じられた時間の中、ぼくと先輩はひとつも言葉を交わさなかった。

ぼくらの間に音はなくても、校舎の方からは人の声と音楽が聞こえる。しかし、それもだんだんと遠ざかっている気がした。

かろうじて紫色だった空は、今では限りなく深い色を見せている。校舎の上に、一番星を見つけた。別の方向には半月も浮かんでいた。あれは上弦の月だったかそれとも下弦だったか……などと考えていると、ふいに先輩が言葉を漏らす。

「もう一年近く前の話なんだけどな」

ぼくが先輩を見ると、先輩は微かに笑って見せた。そして空を見上げる。

「テレビで、女優がインタビューを受けていたんだ。イギリス人で、もう六十歳は越えていたと思う。質問する側は若い日本人なんだけどね」

そこで一旦ぼくの方をうかがう。ぼくが小さく頷くと、先輩は話を続けた。

「ほとんどはその女優が出演している映画の事を喋っていたんだが、最後の質問だけはそれとまったく関係のない話だったんだ。映画の話は全く興味がなかったから、途中までぼんやりと見ていたんだがな」

だからその女優の名前も覚えていないんだ。そう言うってから自嘲するように笑う。

「でも、その日本人がした最後の質問だけは今でも記憶にある。

どうしたら貴女のように生き生きと歳を重ねることができるのか、っていう内容だった」

もう一度ぼくを見る。柔らかな表情をしていた。

「そしたら女優の方がこう答えたんだ。生き生きと歳を重ねたいのなら、十七の少女であったことを自分の中に持ち続けることだ、って。そうすれば青春は終わらないんだってな」

世間では、ぼくらぐらいの年代を青春時代という。じゃあ、その青春時代はどこからどこまでを指すのだろうか？ 始まりは何歳で終わりが何歳だと、すっぱり線を引いて分けられるものなんだろうか？

「そこで私は思ったんだ。六十になっても七十になっても心の中に十七の自分を持ち続けるには、思い出を作るのがいいんじゃないかって。今まさに青春という瞬間に、忘れられない良い思い出を作ることができたのなら、死ぬまでずっと青春でいられるんじゃないかって」

ぼくはずっと先輩の横顔を見ていた。目を逸らすことができなかった。夜空の向こうを見据えるかのように放たれていた先輩の視線は、地面へと向けられる。

「私は怖いんだ。今の私には、毎日が輝いて見える。もちろんいい事ばかりではないけれど、それでもかけがえの無い大切な時間だと思っている。こんな楽しい日がずっと続けばいいと思っている。それをいつか失うなんて嫌なんだ。これが世間で言う青春なら、私はずっと青春を過ごしたい。大人になることが青春の終わりだなんて、私はそんな寂しいことを考えたくない。私は、青春でいる今この瞬間が大好きなんだ」

俯いていた顔は、僅かに持ち上げられた。こちらを振り向き、ぼくに語りかけるように口を開く。

「だから、この二日間がみんなの思い出になって、それがみんなの中で生き続けてくれたらと思うんだ。私自身も、絶対にこの気持ちを忘れたくない」

そこまで言って、先輩はくしゃっと泣きそうな顔で笑う。

学生でいられる期間というのは、思っているよりも短い。ぼくらは今までの人生の大半を学生として過ごしてきたけれど、振り返ってみればあつという間だ。

学生でなくなった先には、今までの何倍もの長い道が待っている。そこに降り立った瞬間、ぼくらはどうなるのだろうか？ 変わって

しまうのだろうか？　いろいろなことを忘れてしまうのだろうか？

先輩はそれに怯えていた。

だからばくも信じたい。この先もずっと、今みたいなキラキラした瞬間は続いていくのだと。

「悪いな、暴走しすぎた」

浮かべていた表情を拭い去るかのように、ハッピの裾で顔をこする。先輩の声は、既に落ち着いた調子を取り戻していた。

「いえ、嬉しいです。そういう話をしてもらえて」

素直にそう答えると、

「ふん」

先輩は照れくさそうにした顔をぼくに向け、それを隠さないまま笑ってみせた。

「まあそんなわけだから、祭りのフィナーレは派手にやりたいと思っ
てな」

そう言いながら自分の腕時計に目を落とす。先輩の腕時計は目盛と針の先に蛍光塗料がついているタイプで、暗闇の中でも時間を確認することができた。

「準備の頃から人が足りないと言っていたのはな、今まで私が言い
続けてきた以外にも理由があるんだ」

「はあ……」

先輩がずっと前から言っていたのは、前年の実行委員長が切れ者
だったという話だ。

去年の文化祭は彼が上手に切り盛りしていたが、今年はそれがない分慌しくなっている。事あるたびに北条先輩はそうばやいていた。先輩があまりにも前年の実行委員長をべた褒めするので、その話を聞かたびに胸がモヤモヤしたものだ。

「というか、主な原因はこっちなんだがな」

ぶり返しかけたばくのモヤモヤに気付くはずもなく、先輩は腕時計に視線を落としたまま不敵な笑みを浮かべる。

「こっちって、何ですか？」

「じきに分かるよ。あと三十秒。下らん話をしているうちにここまで時間が迫っていたとはな。危うくタイミングを逃すところだった」

「だから何のタイミングなんです？」

僕が再び訊ねると、先輩はあからさまに顔をしかめた。

「だからもうすぐ分かると言ってるだろうが。そんなに知りたきやグラウンドをよく見る」

「グラウンド？」

眼前の平らな土地に目をやる。夜のグラウンドというのはあまり見慣れないものだが、時間帯が違つというだけで特別変わったこともない。……と思いきや。

目を凝らせば、ぼつりぼつりと等間隔に小さな柱が立っていた。暗くて遠近感が掴みづらいが、高さは膝より少し低いぐらいだろうか？

よくよく見てみると、その柱は数え切れないほどの数がある。しかし、そのどれもがグラウンドの奥のほうばかりで、手前には全く見当たらなかった。

「上がったかと思えば華々しく散つて、あっと言つ間に消えてしまふ。まるでこの二日間のような」

自分で呟いておいて、先輩はそれを鼻で笑う。腕時計のつけられた左手首は、顔の高さにまで持ち上げられていた。

「先輩、あそこに沢山あるのって……」

「十、九、八、七、六」

ぼくの言葉を無視して、北条先輩はカウントダウンを開始する。先輩の腕時計を見てみると、彼女の声と同じタイミングで秒針が時を刻んでいた。

「五、四、三」

針は頂点に上ろうとしていた。心なしか、数字が小さくなることに先輩の声が嬉しそうに跳ねる。

「二、一 点火だ」

それとほぼ同時に、「ぼんっ」と鈍い爆発音が腹の底を震わす。驚いて音のした方を振り返れば、ちょうど白い光の点が暗い夜空に飛び出すところだった。

輝くそれは天頂に向かつてぐんぐん駆け上がると、ぼくらの座っているよりもずっと高いところで一気に弾けた。光の粒が放射状に飛び散る。

その姿は華やかで、それにもかかわらずどこか寂しさを覚えた。校舎の向こう、残った客のいる方からも次第に歓声が聞こえてくる。

最初の光は消えてしまっても、次々と新たな光が打ち上げられた。ひっそりとしていた景色は、そうやって絶え間なく彩られていった。「いつの間に花火なんて用意していたんですか」

数発上がったところでやっと、僕は口を開くことができた。

「ん？　ずっと前からだよ」

珍しく浮き立った声が隣から聞こえる。

横を見ると、先輩が僕のことを見ていた。その顔は花火に照らされ、比喻ではなく輝いていた。

「驚いたか？」

「驚きましたよ。誰が関わってるんですか」

正直に答えると、先輩は満足そうに微笑む。

「私と、実行委員の中から三人。みんな二年生だ。……あと、当日の下準備を演劇部の部長が手伝ってくれた」

「どうしてそこで演劇部が……」

「昼過ぎから隠れて用意していたんだが、その時に嗅ぎ付けられた。そうしたら是非とも手伝わしてくれと言われてな。こちらも人手は欲しかったから、了承した」

三年生なのによほど暇なんだろうな、と先輩は独りごちて苦笑する。

「当日になってばくに色々押し付けたのは、これが理由だったんですね」

「ぼくが溜息をつくと彼女は頷いて、

「その通り。ついでに言うとは私は最初から花火の準備をするつもりだったから、元からお前に押し付ける予定でいた」

やはり悪気の欠片も感じさせない態度で言うのだった。

「ぼくらが喋っている間も、花火はずっと続いていた。言葉の合間に、打ちあがる音やパチパチと弾ける音が挟まれる。いったい何発用意しているのだろうか？ 予算がどこから出ているのかという疑問は、今は考えないことにした。」

「当日、花火のために管理職クラスが四人も消えることになるからな。一年でも動きのいい奴が欲しかったんだ。だから、お前がいてくれて助かったよ」

「はあ……」

今までこんな言葉を先輩から向けられたことがなかったので、返答も曖昧になつてしまふ。言葉通りの意味なのか、それともやつぱりからかっているだけなのか。

「ぼくの心中を察したらしく、先輩は微かに苦笑いを浮かべた。そして、

「こればかりは本音だ」

花火の音の切れ間。囁くように言った。

直後、空中でどんと光が弾ける。その明かりに照らされて、先輩の顔も橙に染められた。

「というわけで、ねぎらいだ」

ずっと差し出してきたのは、さっきのカフェオレだった。

「え、でも……」

「もちろん開封済みで、さっき先輩が口を付けたのをぼくは見ている。」

その光景を思い出し、目の前にある缶を見つめる。かっと身体の奥が熱くなった。

「金を取ったりはしないから安心しろ」

「そついう事じゃないですっ!」

「毒も入れてないぞ？」

そうでないなら一体何なんだ？　とでも言いたげに先輩は首を傾げる。

しかし、その顔はニヤニヤと笑っていた。この人、絶対に分かった上でやっている。

お前そんなにもウブだったのか！　とからかわれて終わるのだろう。……そう思っていたのだが、北条先輩はそんな甘っちょろい想像をぶち壊してきた。

「そうか、直接じゃないと嫌だというのか」

「え」

ぼくが問いただすのを待たずに、先輩は腰を浮かしてぼくのすぐ傍までやってくる。

どうせまた不敵に笑いを浮かべているんだろうと見たものの、そこには含みのない真剣な表情の先輩がいた。ぼくの膝に手を乗せ、迫るように体を傾けてくる。

待って、何が起きた！？

頭の中がぐるぐると渦を巻くが、混乱するほど事態は複雑ではない気もどこかでしていた。

やがて驚きとか緊張とか、そういう次元を飛び越えて思考は真っ白になった。自分は今どれほど間抜けな顔をしているんだろうという心配さえしている余裕がない。

吐息が掛かるほどの間合いで一旦動きを止め、彼女はゆっくり微笑んだ。

絶え間なく空に咲き続ける色とりどりの花火が、先輩の瞳に映っている。吸い込まれるように見入っていると、先輩は一気に距離を詰めた。

思っていたよりもずっと優しい感触が唇に触れる。

重なっていたのはほんの一瞬。けれど、湿った感触が余韻として

残った。ぼくはそれを確かめるように、下唇を指でなぞる。

さつきよりは離れているものの、それでもまだ先輩の顔は近くにある。くっついた肩からは温もりを感じた。

「これも、からかっている訳ではないからな」

真っ直ぐにぼくの目を見ながら、はつきりと言い切る。

ぼくもそれに応えなくてはいけない。ゆっくりと頷いて、口を開いた。

「わかってます」

膝の上に乗せられたままだった彼女の右手に、自分の左手を重ねる。はっとした顔で先輩はその手に視線を落とすが、またすぐにぼくを見上げた。より水気を孕んだ瞳は、輝いてきらきらと揺れていた。

そして最後にはやっぱり、ニヤリと不敵な笑みを浮かべようとす。しかし、目尻はくしゃつと下げられたままだった。

思うように表情を作れずに、先輩は俯いてしまう。

「こう見えて、ものすごく不安だったんだからな」

よなよなと力の抜けた声が、ぼくの膝に落ちる。

「大丈夫です。先輩はいつだって自信满满でいていいんです」

そう返して左手をぎゅっと握ると、先輩は小さく笑い声を漏らして「そうか」と呟いた。

顔を上げた先輩と視線が絡まる。

それから、どちらともなく空を見上げた。

花火は、これがファイナルだと言わんばかりに次々と飛び出しては弾ける。その度に空気を震わせ、光を振りまく。

それは、ほんのひとときの間だけ夜空に咲くことのできる花だ。あつという間に消え去ってしまうけれど、大きくて華やかな輝きは、ひとつひとつぼくらの心にしっかりと刻み込まれてゆく。

どんなに月日が過ぎたって、その花はぼくらの心でずっと生き続けるだろう。

ぼくらの中に青春という季節が続く限り、永遠に咲き誇る花なんだ。

< Blossom fin >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2208m/>

Blossom

2010年10月8日14時32分発行